

白い花を隠す

作・石原燃

登場人物

藤田雅彦 四〇歳。制作会社ドキュメンタリーキーヨーのディレクター。  
坂井麻衣子 三八歳。喫茶ペチュニア店主。雅彦の元同僚。  
坂井庸子 四五歳。麻衣子の姉。タクシー運転手。  
大友敏也 四五歳。雅彦の上司。プロデューサー。麻衣子の恋人。  
川下秋江 五二歳。雅彦の上司。代表取締役。  
谷響子 三〇歳。雅彦の後輩。ディレクター。  
佐々木ゆう 二六歳。雅彦の後輩。AD。  
森秋夫 五五歳。大手制作会社MHKクリエイティブのプロデューサー。  
中村俊子 六五歳前後。喫茶ペチュニアの常連客。サウナ経営。  
田中 五十歳前後。ドキュメンタリーキーヨーのプロデューサー。  
佐藤 四十歳後半。同社のディレクター。  
白川 同社のAD  
タカシ 同社のAD

都心の歓楽街。

高層の複合ビルが建ち並ぶ裏に、ひっそりと取り残された住宅地。  
その一画に喫茶ペチュニアがある。

舞台は喫茶ペチュニアの店内。

正面上手側に入入り口。開けるとカランカランとなる扉。

店内には、4人がけのテーブル席が二つ。

上手にカウンターがあり、コーヒーを入れる道具が並んでいる。

カウンターの奥に住居につながる扉。

扉の向こうは茶の間だが、客席からは見えない。

店内には、ペチュニアのプラントが並んでいる。

1

二〇〇〇年九月下旬。午前十時ごろ。

ペチュニアが赤や紫の花を咲かせている。

エプロンをつけた麻衣子が、帰った客のカップを片付けている。

中村俊子がコーヒーを飲みながら、花の数を数えている。

俊子 ……二六、二七、二八、……二九、三〇……

麻衣子、床に落ちているボールペンに気が付く。

麻衣子 これ。

俊子 ……。

麻衣子 俊子さんの。

俊子 ……。

麻衣子 ねえ。ちよっと、これ。

俊子 なに、もう。

麻衣子 だから。

俊子 (ボールペンを見て) 私んじゃないよ。そこにいた人でしょ。

麻衣子 でも、おじさんだったよ。よれよれの背広着て。こんな可愛いの使うかなあ。

俊子 ミレニウムだから。

麻衣子 ミレニウム記念なの、これ。

俊子 もう。わかんなくなっちゃったじゃない。

麻衣子 なにが。

俊子 花の数。

麻衣子 ペチュニア。(と、ボールペンをエプロンのポケットにしまう。)

俊子 だつてまだこんなに咲いてるなんてさ。うちのなんて、もう完全にひからびてる。

麻衣子 え、なんで。

俊子 さあ。人を見るんじゃない。

麻衣子 夏前に切り戻したんだよね。

俊子 んー……。

麻衣子 やらなかつたの。

俊子 もうちよっと咲かせてからと思つて。

麻衣子 それじゃあ……。

俊子 やっぱ駄目、切り戻さない。

麻衣子 駄目じゃないけど……。(と、サミを取り出し、いくつか花を切り戻す。)

俊子 可哀想な気がしちゃうんだよ。まだ咲いてるのに。

麻衣子 切つたのは花瓶で楽しめばいいんだよ。

俊子 わかつてただけだよ。

麻衣子 ペチュニアっていうのはね、人間と同じ。野放しにしといたら駄目なの。きっちり形

を整えて管理してあげないと。

俊子 なんか息苦しいね、管理だなんて。

麻衣子、カップをお盆に載せ、テーブルを拭く。

麻衣子 なに言つてんの、たかさんの従業員管理してる人が。

俊子 もう引退させてよ、二一世紀なんだから。

麻衣子 おかわり入れようか。

俊子 いい。眠れなくなっちゃうから。

麻衣子 まだ十時だよ。

俊子 昼寝するの。

麻衣子 これから。自由すぎない？

俊子 だっていい試合、ぜんぶ夜中なんだもん。  
麻衣子 ああ、オリンピック。

俊子 昨日もQちゃんの走り見てたら朝になっちゃって。

麻衣子 そこまで興味あるなんて知らなかった。

俊子 こう見えても日本代表の試合はテレビの前で正座して見るタイプだから。

麻衣子 うそ。

俊子 うちの人の位牌膝に載せてね。

麻衣子 うわあ。無理。店休みにできないし、ハイライトだけでいいわ。

俊子 私だって前のアトランタのときはそうだったよ。いまはもう娘夫婦に全部任せてるから。

麻衣子 みっちゃんの旦那さん、有能そうだもんね。

俊子 でしょう。今じゃ入り口の前掃くだけが私の仕事。

雅彦が入ってくる。

麻衣子 (カップを下げ) いらっしやい。

雅彦 ブレンド、とりあえずひとつ。

麻衣子 待ち合わせ。

雅彦 (テーブル席につきながら) あとから三人来るんだ。全部で四人。

麻衣子 会議。(と、水とおしぼりを四人分用意する。)

雅彦 うん、会議室使ってたさ。

麻衣子 朝一から。普通の会社みたい。

雅彦 机の下で誰か寝てんだ。

麻衣子 そういうことか。

雅彦 作業徹夜だったみたいで。

麻衣子 もうさ、あの部屋仮眠室にしたほうがいいよ。

麻衣子、水とおしぼりを出し、ブレンドを入れ始める。

俊子、財布を出して席を立つ。

俊子 麻衣ちゃん、私帰るわ。

麻衣子 ああ、はいはい。(と、レジに行こうとする。)

俊子 いい、いい。ここ置いとくから。(と、五百円を置く。)

雅彦 なんかすみません。

俊子 え、なにが。

雅彦 気使わせちゃったかなって。

俊子 別に。仕事しないと怒られるから。

雅彦 仕事。

麻衣子 駅前のカプセルホテルのオーナー。

雅彦 ああ、俺よく泊まりますよ。あそこのサウナ気に入ってる。

俊子 知ってるよ。あんた、その制作会社の人でしょ。なんだっけ、ほら。

雅彦 ドキュメンタリートーキー。

俊子 そう、それぞれ。  
雅彦 なんて。

俊子 麻衣ちゃんも前に勤めてたでしょ。この家のことは、この子がこんな小さいころから知ってるんだから。

雅彦 そうなんですか。俺たち同期なんですよ。

麻衣子 同期だったって、こっちはずっと制作ですから。

雅彦 部署は違っても同期は同期だろ。

麻衣子 (俊子に) 同期でディレクターになれたのこの人だけなの。優秀なんだから。

雅彦 いや、そういうことじゃなくて……

俊子 (サウナのサービス券を渡し) 大変だろうけど、頑張ってね。これ、サービス券。

雅彦 おお、千円オフ。

俊子 じゃあ麻衣ちゃん、ごちそうさま。(と、出て行く。)

麻衣子 ありがとうございます。

麻衣子、雅彦にブレンドを出し、俊子がいたテーブルを片付け始める。  
雅彦、サービス券を見ている。

雅彦 これ有効期限二〇〇〇年一杯じゃん。あと三ヶ月しかないよ。

麻衣子 やっぱり、気前いいと思った。

雅彦 なんだよ、それ。

麻衣子、黙々とテーブルを片付ける。

雅彦 麻衣子さあ、クラシック興味ない。

麻衣子 あんまりないなあ。

雅彦 昔、番組で取材した人なんだけど、覚えてないかな。シングルマザーの。

麻衣子 ああ、ドイツから来たピアニスト。

雅彦 久しぶりにコンサートするんだって。よかったら一緒に行かない。今週末なんだけど。

麻衣子 でもクラシックよくわかんないから。

雅彦 面白い人だから紹介したいんだよ。向こうも会いたがってるし。

麻衣子 私に？

雅彦 電話で何度かやりとりしただろ。それが印象に残ってたみたいで。

麻衣子 そんな印象に残るようなやりとりしたかなあ。

雅彦 直接聞いてみたらいいじゃん。向こうは覚えてるんだから。

麻衣子 やっぱやめとく。やらなきゃいけないこともあるし。

雅彦 そう。

麻衣子 ごめんね。

雅彦 いいんだ。俺も行けるかわかんないし。

麻衣子 忙しそうでもんね。

雅彦 また新しい企画通ったみたいで。

麻衣子 それで会議。

雅彦 大友さん、離婚してからやけに張り切ってきて。なんでも仕事受けちゃうんだよ。  
麻衣子 心機一転頑張ろうと思ってんでしょ。  
雅彦 別にいいけどさ、仕事振られる身にもなってくれよ。  
麻衣子 信頼してるんだよ、藤田くんのこと。  
雅彦 俺の体力を、だろ。

谷、入ってくる。

雅彦 おお、来た来た。

谷 ごめんなさい、遅くなって。

雅彦 大友さんたちもまだだから。

谷 あの、考えたんですけれど、私やっぱり(できない)……。

雅彦 まだ言ってるの。いいからとりあえず座ってよ。

谷 (席につく)……。

雅彦 ブレンドでいい。

谷 はい。

雅彦 ブレンド、もう一つ。

麻衣子 はい。(と、ブレンドを用意し始める。)

谷 なんで私なんですか。

雅彦 戦争のこと、興味あるみたいだから。

谷 そりゃあるけど、ディレクターとしてそういう番組に関わったことないし。

雅彦 大丈夫だよ、そこは。フォローするし。手空いてるんでしょ。

谷 ただ手が空いてるわけじゃないんです。仕事もらえてないんですよ、私。

雅彦 気のせいだって。現に俺、こうして頼んでるんだし。

谷 知ってますよね。

雅彦 松田選手のこと。

谷 私が怒らせちゃったから、フジからの仕事減っちゃって。

雅彦 しょうがないよ、あれは。元はといやあ向こうが悪いんだから。

谷 でも、もうちよつとうまく交渉してたら。

雅彦 あんなガチガチに条件つけられたらどうしようもないよ。いいとこばっかり撮らせよう

として、PV作ってんじゃねえつーの。

谷 そうなんですけど。

雅彦 な、だから気にすんなって。

谷 はあ……。

麻衣子、ブレンドを出す。

麻衣子 藤田くんみたいに言えたら苦労しないよね。

雅彦 えーなんだよ、それ。

麻衣子 ほっといてほしいときは、ちゃんと言った方がいいよ。

谷 いや、ほっといてほしいなんて、そんな……。

雅彦 芽衣子。

麻衣子 ごめんごめん。冗談。(と、カウンターへ戻る。)

雅彦 遅いな、大友さん。

間。

谷 正直いって、びびってるんです。

雅彦 え、なに。

谷 あの法廷調べたんですけど。

雅彦 女性国際戦犯法廷。

谷 日本の戦争責任裁くんですよ、  
「慰安婦」にされた女性たちが世界中から集まって、日本  
政府と天皇を「人道に対する罪」で訴える。

雅彦 女たちの民衆法廷だよ、市民団体が提唱した。

谷 東京裁判で裁かれなかった罪を、民衆の手で裁こうってことですよ。

雅彦 国際的にも注目されているらしいよ。ついに日本が天皇裕仁の戦争責任を問うって。

谷 そんなことできると思います？

雅彦 え。

谷 だって「慰安婦」問題ですよ。河野談話で政府の関与認めてるって言っても、国家補償は

してないし、被害者が起こした裁判でも、国の責任が認められたことなんか無いのに。

雅彦 だからこそその民衆法廷なんじゃないの。

谷 本場に放送できるんでしょうか。

雅彦 俺も出来ないと思ったけどさ、企画が通ったんだから、できるんですよ。

谷 それはそうですけど。

大友と森が慌ただしく入ってくる。

雅彦、谷、席を立てて迎える。

大友 悪い。遅くなって。電車止まっちゃってさ。

雅彦 人身事故ですか。

大友 そう。この頃多いよな。

森 大友ちゃん、イライラしちゃって、たばこ吸い出すんじゃないかって心配したよ。

雅彦 そろそろ辛くなってきました？

大友 なに言ってるんだ。今度ばかりは本気でやめるんだから。

雅彦 (森に) 紹介します。彼女、谷響子ディレクター。

谷 (名刺を出して) 谷です。

森 あれ、ディレクター、藤田ちゃんじゃないの。

雅彦 そうなんですけど、まだどういう体制になるかわからないんで、同席させてください。

森 そうなんだ。(名刺を出して) MHKクリエイティブの森です。

雅彦 これ森さんが持ってきた企画なんだ。

谷 よろしく願います。(一同、席につく。)

雅彦 企画通ったって聞きましたけど。

大友 そうなんだよ。思いの外あっさり通っちゃってさ。

谷 その前に、注文。

大友 俺、ブレンド。森さんは。

森 同じもので。

谷 (麻衣子に) ブレンド、ふたつ。

麻衣子 はい。

麻衣子、ブレンドを入れ始める。

大友、雅彦と谷に資料を渡す。

雅彦 (資料を見て) 四本シリーズになったんですね。

森 「人道に対する罪」をテーマにした四夜連続シリーズにするんだって。

大友 俺たちが担当するのは、予定通り第二夜と第三夜の二本だから。

森 残りはMHKが自分らで制作するって。(メモを探し) ええっと、全体の流れはねえ……

大友 (自分のメモを読み) 第一夜で「人道に対する罪」っていう概念がどんな背景から出てきたかを整理。第二夜で女性国際戦犯法廷、第三夜で国際公聴会を紹介。戦時下での性暴力の問題を考える。そして第四夜で和解への道を探る。

森 そうそう、そういう感じ。

谷 (メモを取り) 第二夜が女性国際戦犯法廷、第三夜が国際……。

大友 国際公聴会。公に聴く会。

谷 女性法廷は旧日本軍がやった「慰安婦」制度を裁くんですよ。その国際公聴会っていうのは。

森 現代の紛争下で性被害を受けた女性たちが証言するらしいよ。

谷 現代の紛争下ですか。

森 ソマリアとかシエラレオネとか。

雅彦 女性法廷の一環として開催されるんだよ。最初の三日間が女性国際戦犯法廷で、最後の一日が国際公聴会。

大友 紛争下での性暴力はいまも全世界で続いてて、ほとんど裁かれてない。不処罰の連鎖が続いてるっていうのが主催団体の考えだから。

谷 ああ、だから女性法廷と一緒に国際公聴会を開くんだ。

大友 旧日本軍を裁くことが、不処罰の連鎖を断ち切ることになるってこと。

谷 なるほど。

麻衣子、ブレンドを二つ出す。

大友 ありがとう。

麻衣子、目配せで応える。

雅彦 スケジュールは出てるんですか、女性国際戦犯法廷の。

大友 二枚目。

雅彦 七日の夜に前夜祭。八日の午前中に開廷宣言、冒頭陳述……、このアミカス・キュリエってなんですか？

大友 法廷の助言者って意味らしい。今回の法廷じゃ、被告である日本政府が法廷への参加要請を無視してるから、代わりに予想される反論を陳述するんだそう。

雅彦 ずいぶん公正にやるんですね。

森 そりゃ国際法廷だからね。

大友 各国審理は専門家の証言を挟みながら、八日の午後が南北朝鮮、九日が中国、フィリピン、台湾、十日がマレーシア、オランダ、インドネシア、東ティモール、そして日本。

雅彦 元日本兵の証言もあるんだ。ぱんぱんだな。

大友 判決は最終日。国際公聴会の翌日だな。

谷 十二日の朝ですね。

大友 判決は当時の国際法に照らして出されるからちゃんと確認しとけよ。

雅彦 はい。でも、よく通りましたよね。

大友 M H Kの三田村さん、やる気満々だったよ。十五分でOK取ったって。

雅彦 ほんとですか。信じられないな。

大友 俺聞いたんだよ、天皇の戦争責任を問うんですよ、M H Kは腹をくくったんですね。

雅彦 そしたら。

大友 笑われたよ。もし、そういう結論が出たとしても、それはそれできちんと伝えるしかないでしょって。議論が分かれてるって言ったって、天皇にまったく責任がないっていうのは無理があるんだからって。

雅彦 まあ、天皇自ら作戦決めてたっていう文書も残ってますからね。

大友 三田村さんもそう言った。要は見せ方だって。

森 あの人は社会派な番組作ってきた人だからね。天皇の戦争責任についても、何回かやってるんじゃないかなあ。

雅彦 そうですか。

森 もう藤田ちゃん、心配しすぎ。そりゃ、なんか言ってくる連中もいるかもしれないけど、国際社会からしてみたらね、ラッセル法廷から続く民衆法廷の歴史に残る取り組みだよ。世界が注目してるのに、報道しないわけにいかないでしょ。

雅彦 そりゃもちろん。法廷を記録するだけでも、歴史的な意味はあると思いますよ。

森 でしょ。三田村さんもその辺のこと押さえてるのよ。

雅彦 じゃあ、裁判そのものをきっちり描けばいいわけですね。

森 そうなんじゃない。あとなんか言われたっけ。

大友 (メモを読み) 法廷がどのように形成されていくのか、その難しさも描いて欲しい。

森 ああ、そうそう。

雅彦 どのようって言ったって、法廷まであと二ヶ月ちよつとですよ。もう遅いでしょ。

森 まあできる範囲で大丈夫でしょ。

雅彦 国際実行委員会の日本代表ってウーマンライツの人でしたっけ。もう話は通ってるんですね。

森 まだまだこれからよ。

雅彦 じゃあ、早くアポ取らないと。

大友 やってくれるか。

雅彦 ……はい。ただ、この間も言いましたけど、俺ほかの企画も抱えちゃってるので、ひとりで動くのは厳しいんですよ。俺としては、谷さんに入ってもらえると嬉しいんですけど。

大友 そうか。谷はどうなの。

谷 はい。法廷の意義はすごく感じてます。

雅彦 第三夜は俺がやるから、第二夜だけでもお願いできると助かるんだけど。女性国際戦犯法廷の方。

谷 女性国際戦犯法廷。

雅彦 フォローはするから。

谷 はい。じゃあやってみます。

森 よかったあ。どうなるかと思ったよ、東大の講演会で法廷のこと知って、ビビビって来たのに乗ってくれる制作会社がなくてさあ。

大友 ドキュメンタリーの看板出してるのに、うちがやらないでどうするんですか。

森 おお、さすが大友ちゃん。

大友 「慰安婦」問題が解決しないと二一世紀はありませんからね。

森 じゃ、そっちの体制としては、大友さんがプロデューサーで、藤田さんと谷さんがディレクター、と。うちからは僕がプロデューサーとして参加するから。

雅彦 M H Kは三田村さんと木村さんですよ。

大友 うん。三田村さんがチーフプロデューサーで、木村さんがデスク。

森 番組はV T Rとスタジオ収録の構成でいくから。

雅彦 スタジオゲストは候補上がってるんですか。

森 三田村さんは、坂下百合子先生がいいって言ってたな。

雅彦 豊島女学院の。

森 韓国朝鮮のB C級戦犯の問題やってきた人だし、ちようどいいんじゃないかって。

雅彦 でもあの法廷の実行委員になってるはずですけど。

大友 俺もそう言ったんだけど問題ないって。

雅彦 そうですか。じゃ、オファーしちやっついていいですね。

大友 うん、頼むよ。

雅彦、谷に目で合図を送る。谷、オファーする相手をメモする。

佐々木が入ってくる。

佐々木 あー、こんなとこにいた。

雅彦 なんだよ、うるせえな。

佐々木 なんだじゃないですよ。Qちゃんの実家行くんでしょ。

雅彦 やべえ。そうだった。

森 なになに。金メダルのお祝い。

雅彦 去年から密着してたんですよ。もう狙い通り。

森 おお、さすがだねえ。

佐々木 滝さん、車回してくれてますから。早く。

谷 行ってください。あと聞いときますから。

大友 なあ、佐々木。

佐々木 はい。

大友 お前、戦争責任って興味ないか。

佐々木 え。戦争責任。

雅彦 ああ、ダメダメ。こいつそういうの興味ないですから。

佐々木 そんなの詳しく聞いてみたいとわかんないじゃないですか。

雅彦 わかるよ。お前選挙にすら行ったことねえだろ。(大友に) ADなら、たかしか、白川

さんか。俺、後で当たるときます。

大友 そうか。(佐々木に) じゃあまあ、そういうことだから。

佐々木 なんなんすか。もう。

大友 いいから早くいけよ。滝さん待ってんだろ。

佐々木 はい。(雅彦に) 先行ってますよ。

雅彦 おお、すぐ行く。

佐々木、麻衣子に軽く会釈して、出て行く。

雅彦、書類などをしまい、店を出る支度をする。

雅彦 森さんすみません。俺、これで。

森 じゃあ、よろしくね。

雅彦 こちらこそ、よろしくお願いします。

森 今後の予定は谷さんに言っとくから。

雅彦 はい。(谷に) ごめん、頼んだ。

雅彦、出て行く。

大友 企画書、今日の内容踏まえて直せるかな。

谷 はい。すぐやります。

森 企画書OK出たら、十一月のなかばにMHKで定時部会にかけることになるから、実行委員会と話詰めといてね。日本の代表、ウーマンライツの赤坂あきみさんって人だから。

谷 さっそくアポ取ります。

森 先方の協力なしには成り立たない企画だからね、頼むよ。谷ちゃん。

谷 はい。

森 (時計を見て) 僕もそろそろいかないと。(と、コーヒーを飲み干す。)

大友 忙しそうですね。

森 オリンピック中はどうしてもね。(麻衣子に) お愛想。(と、身支度を始める。)

麻衣子 別々にしますか。

森 いいよ、一緒に。

大友 いいですよ、ここは自分で払いますから。

森 いいから、いいから。(麻衣子に) 全部まとめて。

大友 すみません、ごちそうさまです。

麻衣子 二千元になります。

森 (金を出しながら) 領収書ちょうだい。MHKクリエイティブ、あと株。

麻衣子 はい。ちようどお預かりします。

森 (麻衣子の顔を見て) あれ、どっかでお会いしてませんか。

麻衣子 え、あの……。

大友 前うちにいたんですよ、彼女。

森 ああ、そうか。

麻衣子 (領収書を渡し) じゃあこれ。ありがとうございます。

森 ありがとうございます。(大友に) じゃ、あとよろしくね。

森、出て行く。

谷 大友さん、まだいます？

大友 先帰っていいよ。ちよつと整理したいこともあるし。

谷 じゃお先に失礼します。昼までにアポ取っちゃいたいんで。

大友 うん、頼んだ。

谷、出て行く。

大友 焦ったあ。

麻衣子 森さん覚えてたんだね。(と、テーブルを片付け始める。)

大友 絶対忘れてると思ったのにな。酔っ払ってたし、店暗かったし。

麻衣子 別にいいでしょ、覚えてたって。

大友 でも、まだ会社のやつらには言っていないし。

麻衣子 言うんでしょ、もう。結婚するんだから。

大友 言うよ、言うけど、その前にお姉さんに言わないと。

麻衣子 お姉ちゃんには私から言うよ。

大友 そういわけにはいかないよ。そこはやっぱりちゃんとしないと。

麻衣子 だって全然時間合わないじゃない。大友さん毎日遅いし、お姉ちゃんはお姉ちゃんです。

タクシー会社のシフトばらばらだし。

大友 方がいいって言うってくれたら、空けるようにするよ。

麻衣子 じゃあ、いま。

大友 いま!

麻衣子 いまいるから。夜勤明けで寝てる。

大友 いまは駄目だよ。なんにも準備してないし。

麻衣子 ほらやっぱり。(と、片付けを中断して、花を切り始める。)

大友 (麻衣子が花を切るのを見て) 切っちゃうんだ。

麻衣子 言ってるでしょ。野放しにしといや駄目なんだって。

大友 起こしたら悪いだろ。寝起きの顔見られたくないだろうし。

麻衣子 そんなこと気にしなくていいよ。どうせ一緒に暮らすんだから。

大友 え、一緒に暮らすの。

麻衣子 結婚したらここに住むって言ったじゃない。

大友 言ったけど、一緒に住むとは……。

麻衣子 お姉ちゃんひとりにできないの知ってるでしょ。

大友 娘さんのこと。もう結構経つんだろ。

麻衣子 七年かな。でもまだだめ。近所の人が教えてくれた。時々美希と住んでたアパートまで来て、近くの河原でぼんやりしてらるって。

大友 そう簡単じゃないよな。

麻衣子 お母さんのことがあってすぐだったしね。

大友 わかった。その方向でちゃんと話す。

麻衣子 うん、お願いね。こっちもそんなにのんびりしてられないし。

大友 わかってる。

麻衣子 ぐずぐずしてたら、生まれちゃうんだから。

大友 近いうちに、絶対。

麻衣子 ほんと。お腹大きくなってから話すんじゃ格好悪いんだからね。

大友 わかってるって。話すよ、話せばいいんだろ。

庸子、カウンター奥の住居から出てきている。寝起きの体。

庸子 子ども出来たんだ。

麻衣子 お姉ちゃん。

庸子 おめでどう。

麻衣子 どっから聞いてたの。

庸子 何ヶ月なの。

麻衣子 二ヶ月。

庸子 ふーん。よかったね。

麻衣子 この人、大友敏也さん。前勤めてた制作会社の上司だった人。

庸子 どうも。

麻衣子 バツ一だけどね、もう裁判も終わって、ちゃんとしてるから。

大友 はじめまして。大友と申します。いつも、麻衣子さんにはお世話になって。

麻衣子 優秀なプロデューサーなんだよ。社長に引き抜かれて入ったんだけど、いい番組たくさんつくって会社立て直して、いまじゃ取締役のひとりなんだから。

大友 いや、そんな大したことないです。

麻衣子 大したことなくないの。今度だつてね、戦後の歴史に残るようなドキュメンタリー作るんだから。女性国際戦犯法廷って、知らないでしょ。戦争中、日本軍に「慰安婦」にされた女性たちが、天皇を裁くんだったって。

庸子 ふーん。

大友 十二月にね、民衆法廷があるんですよ。国際的にも注目されてるんですけどね。

麻衣子 世界中から人が集まるんだって。千人？ 二千人？

庸子 (鼻で笑って) そんなこと興味ないくせに。

麻衣子 ……。

庸子 (大友に) 妹をよろしくお願いします。

大友 は、はい。

麻衣子 いいの、私が結婚しても。

庸子 どうして。いいに決まってるじゃない。

麻衣子 ここで暮らすんだよ、この人も。

庸子 そりゃそうでしょ。いいよ、私出て行くから。

麻衣子 それはだめ。

庸子 なんて。

麻衣子 ひとりじゃ寂しいでしょ。

庸子 寂しい？ 私が？

麻衣子 だって、まだ……。

庸子 美希のこと。

麻衣子 ……。

庸子 そんなこと気にしなくていいよ。ひとりが嫌なら会社の寮に入ったっていいんだから。麻衣子 でも部屋数はあるんだし、もったいないじゃない。

庸子 別にそんなに無理することないでしょう。

麻衣子 無理なんかしてない。出て行くのは絶対だめ。

庸子 ……わかった。ちよっと考える。……もうちよっと寝るわ。夕方からまた出ないといけないんだ。ごめんね。

庸子、奥の部屋へ入ろうとする。

大友 あのこちらこそ、よろしくお願いします。

庸子、振り返って、笑う。

暗転。

2

二〇〇〇年一二月下旬。夜九時。

喫茶ペチュニア。

ペチュニアは小さく切り戻されて、冬を超える準備が整っている。

クリスマスツリーが出されている。

店の営業を終えた後、内々で飲み会が開かれる。

店のテーブルが真ん中に集められている。

谷が、スーパードで買ってきた総菜や、乾き物を、紙皿に取り分けている。

雅彦は部屋の隅で椅子に座り、落ち込んだ声でクリスマスソングを歌っている。

谷 やめてくださいよ。陰気くさい。

雅彦 なが。

谷 お経みたいですよ。

雅彦 谷さん、知ってた。

谷 なにを。

雅彦 大友さんと麻衣子のこと。

谷 なんとなくは。

雅彦 いつから。

谷 「精神医療のいま」が賞取ったとき、ここでお祝いしたじゃないですか。あの時、麻衣子さんが大友さんの肩にやたらと手置いてて。

雅彦 え、あんな頃から。あの人まだ妻子持ちだったじゃん。

谷 （奥を気にして）聞こえますよ。

雅彦 ……みんな知ってたの。

谷 たぶん。

雅彦 ……。

谷 まさか、それで落ち込んでるんですか。

雅彦 違うよ。そんなわけではないだろ。

谷 無理しなくていいですよ。ふたりを祝いたい人だけでやりますから。

雅彦 なに言ってるんだよ。祝いたいに決まってるだろ。なに言ってるんだよ。

谷 ほら、ぐだぐだ言ってるで、グラス出して。

佐々木が、両手にビールと缶酎ハイが入った袋を持って、入ってくる。

佐々木 酒買ってきました。

谷 ありがとう。その辺出しといて。

佐々木 大友さんは。

谷 奥で麻衣子さんの着替え、手伝ってる。

雅彦 あと誰が来るの。

佐々木 みんななんののかんの切羽詰まってるみたいで。社長は後で来るって言ってましたけど。

雅彦 まじ、社長来んのか。

佐々木 そりや来ますよ。大友さん引っ張ってきたの、社長なんですから。

雅彦 面倒くせえなあ。（と、缶ビールを開けて飲む。）

佐々木 ああ、駄目ですよ。まだ飲んじや。

雅彦 あーうまい。

佐々木 もう。

雅彦 あれ、白川さんは。

谷 帰った。

雅彦 ええ、聞いてないよ。

谷 家の用事があるんだってさ。

佐々木 デートっすよ。もうすぐクリスマスだし。

雅彦 うちのチームに合わせて日にち決めてもらったんだぜ。

佐々木 だから俺にADやらしとけばよかったのに。

雅彦 うるせえ。

谷 飲む気分じゃないんじゃないかな。

佐々木 なんかつたんすか。

谷 今日、中間素材のチェックだったから。

佐々木 OKでたんでしょ。

谷 うん。でも結構直しもあるし。

雅彦 三田村さんのことなら、気にすることないよ。あの人もあだから。

谷 ……でも、私が坂下先生のインタビュー入れとけば。

雅彦 俺も入れなくてもいいと思っただし。

谷 よく考えたら、入れないなんてありえなかったんですよ。スタジオゲスト降りてもらおう代わりに、VTRでインタビュー入れさせてもらおうって話だったんだから。

雅彦 入れる、入れないはそういうことで決めるんじゃないからさ。

谷 でもMHKの都合で降りてもらったんですよ、坂下先生は快諾してくれてたのに。

佐々木 なんすか、MHKの都合って。

雅彦 上が、法廷の実行委員をスタジオに呼ぶのはやっぱりまずいって言い出したんだよ。だから最初にそう言ったのに。

佐々木 そりゃ埋め合わせしときたいですよね、MHKとしちゃ。

谷 坂下先生はそんなこと気にしないと聞いたんだけど。

佐々木 谷さん、テスト勉強苦手だったでしょ。

谷 は、なに突然。

佐々木 テスト勉強のコツはね、出題した先生がなに考えてるか読み取ることなんですよ。

雅彦 お前なあ、そんなだからいつまでたってもADなんだぞ。

佐々木 えーそうなんですか。大事でしょう、番組作りにもそういう感性。

雅彦 なにが感性だよ。ぐだぐだ言っていないで、グラス出して。

谷 真似しないでください。

佐々木 どこにあるんすか、グラス。

雅彦 カウンターの裏。

佐々木 はいはい。

佐々木、カウンターの裏に回って、グラスを物色する。

佐々木 それより、そのなんとか法廷、右翼来て大変だったららしいじゃないすか。

谷 誰に聞いたの。

佐々木 滝さんがすごかったって。

谷 そう。会場前に街宣車ずらーと並んで。あんまりすごいから、そのカット冒頭に入れたんだけど、外せて怒られちゃった。右翼つけあがらせるだけだった。

佐々木 怒らなくなつていいのにねえ。

谷 なんかやけにピリピリしてるんだよ、三田村さんも木村さんも。

雅彦 MHKにも来たみたいだからね、街宣車。

佐々木 そうなんですか。

谷 ニュースで女性法廷のこと扱ったってクレームつけてきたみたい。これが初めてじゃないとは言ってたけど、動揺してたんじゃないかな。

佐々木 うちにも来るんじゃないすか。

雅彦 下請け脅したってなんにもなんねえだろ。代わりはいくらだっているんだから。

佐々木 ああ、そうか。(グラスをテーブルに運び終わり) こんなもんすかね。

谷 みんな遅いね。ちよつと様子見てきてよ。

佐々木 はい。

佐々木、小走りで行く。

谷 ……ほんとに大丈夫かな。

雅彦 右翼。

谷 っていうか、私がディレクターで。

雅彦 大丈夫だって。心配すんな。

谷 だって右翼の街宣とか、自由主義史観の議論とか、ほとんどカットだったし。

雅彦 いいんだよ、まだひと月もあるんだから。法廷だけでいけるって確認できりや十分。

谷 法廷での女性たちの証言、圧倒的でしたもんね。

雅彦 何十年も言えずにいたんだろうな。ほんと重かった。……大丈夫。いい番組になるよ、あれを自由に撮影できたのうただけなんだから自信持つて。

谷 でも三田村さんがどういう風にしたいのか、いまいちよくわからなくて。

雅彦 MHKの顔色伺ってもしようがないよ。谷さんが伝えたいことはなんなのが明確になつてりゃいいんだって。

谷 伝えたいこと。

雅彦 女性たちの告発を受け止めて、どうするか。

谷 うち親が離婚してて。

雅彦 (戸惑い) そうなんだ。

谷 ごめんなさい、突然こんな話。

雅彦 いや、それで。

谷 いいんです、別に。大した話じゃないんで。

雅彦 いいから、それで。

谷 ……中学卒業する少し前にね、十年ぶりくらいに父が突然訪ねてきたんです。卒業のお祝いにつて花持つて。……嬉しくて上がってもらいました。……お茶出さなくちゃと思つて、台所でお湯沸かしてたんです。そしたら父が……。

雅彦 ……。

谷 いや、大丈夫だったんですよ。危なかったんですけど、私、思いつきり暴れて。お湯の入ったやかん倒しちゃったんです。そしたら、逃げて行きましたから。……大したことじゃないって思つてたんです。……でも……。

雅彦 ……。

谷 ……すみません、これ初めて言いました。なんか言いたくなっちゃつて。

雅彦 いや、いいよ。

谷 東ティモールのマルタさんが羽田に着いたとき、到着出口でカメラ構えてた私たちを見つけて、迫ってきたじゃないですか。……「シモムラ！」って叫びながら。

雅彦 ああ、あれびびつたな。

谷 わかつちやつたんです、あの時。あの人が戦場でどんな目にあつたのか。……いや、違う。

わかったなんて言えない。ただ、私の想像力なんかじゃ追いつかないような、ひどい、恐ろしいことを、日本はしたんだ。それがわかった。

雅彦 ……。

谷 マルタさん言っていました。「私は日本へ見物をしに来たものではありません。真実を語りに来たのです。」あの場に集まった人たちは、みんな血を吐く思いで証言してた。万愛花さんが証言の途中で失神したときは、苦しくなって、こっちまで倒れそうでした。万さん、同じ経験した女性に言ったそうなんです。「死ぬことなんて考えなくていいよ。まだ大事なことがあるからね。この古い体で闘おうよ。」……加害国の人間として受け止めるの、めっちゃ辛いです。でも、その証言を、こんなにも多くの人が受け入れている。拍手を送って、一緒に憤ってる。それが、なんか奇蹟みたいで、私の尊厳まで救ってくれた気がしたんです。元日本兵の加害証言には吐き気がしました。でも、気がついたら夢中で拍手をしてた。裁かれることでしか救われなない彼らの尊厳も救われたと思った。マクドナルド首席判事が天皇の有罪を言い渡したとき、私、自分でも驚くくらい感動してました。私たちは人間なんだ。それだけのことを認めてもらうのに、長い長い時間がかかったけど、これからは国際法で「人道に對する罪」を裁くことができる。世界はここまで来たんだ。やっと。……すみません。なんか熱くなっちゃって。

雅彦 いや。俺もそう思ったから。

谷 会場で感じたことをきちんと伝えられたら、本当になにかが変わるかもしれない、心からそう思えた。こんな気持ちになったの初めてで。

雅彦 うん。そうだな。

谷 頑張ります、私。

佐々木、秋江が来る。

佐々木 社長来ました。

秋江 ハッピーウエディング！

谷 お疲れ様です。

秋江 なんだこれしかないの。

谷 技術の人たちが後で顔出してくれると思うんですけど。

秋江 締まらないじゃない。取締役の結婚祝おうって言って、これじゃ。

雅彦 すみません、俺たちの都合に合わせてもらっちゃったんで。

谷 そうなんです。今日、中間素材のチェックだったんで、キリがよくて。

秋江 そういうこと言ってんじゃないの。私はあんたたちより忙しいんだよ。だけど、無理してスケジュール空けたの。わかる。意識の問題。

谷 すみません。

秋江 いいけどさ、本人たちは。

谷 奥に。もう出てくると思うんですけど。

秋江 (部屋を見渡し) テーブルクロスくらいすればいいのに。殺風景じゃない。(テーブルに並んだ酒を物色し) なにこれ。ビールと缶酎ハイしかないの。

佐々木 そんなに予算なかったんで。

秋江 しょうがないな。(財布から一万円札を三枚出し) もうちよつとなんか買ってきなさい

よ。ワインくらいないと様になんないでしょ。

佐々木 さすが社長、太っ腹。

秋江 そういうのいいから。早く行きなさい。

佐々木 すんません。行つてきます。

佐々木、飛び出していく。

秋江 ほんとにお前らは。飲み会の準備も満足にできないんだから。

谷 すみません……。

奥から、大友と麻衣子が出てくる。

麻衣子は妊娠五ヶ月のお腹。白いワンピース姿。

大友 すみません、遅くなっちゃって。

谷 麻衣子さん、素敵。

麻衣子 ありがとう。ただの飲み会なのに恥ずかしいって言ったんだけど。

大友 社長、忙しいのに、すみません。

秋江 ほんとだよ。来てみりや、人は集まってないし、ビールと酎ハイしか買ってないし。

大友 ほんとですね。

秋江 しょうがないから、いま佐々木にワイン買いに行かせたよ。

大友 え、(慌てて財布を出そうとする) じゃあお金。

秋江 いいよ、それくらい。私からのお祝い。

大友 でも、お祝いならもう。

秋江 いまさら遠慮しないでよ。さんざん飯食わせてやったでしょ。

大友 それはもう。

秋江 お前のことはここまで育ててきたんだから。どこまでも面倒見るよ。

大友 (感動して) ありがとうございます。

秋江 もうのど渴いちゃったよ。

大友 乾杯しよう、乾杯。

谷 でも、佐々木くんがまだ。

大友 いいよ、あいつは。社長、乾杯の挨拶してくださいよ。

秋江 (喜んで) ええ、私？

大友 はい。お願いします。(ビールをグラスに注ぎ、雅彦や谷に渡す。麻衣子に) お前なに

飲む。ウーロン茶。ウーロン茶ある。

谷 あ、冷蔵庫。

麻衣子 いい。いい。先、乾杯しよう。

大友 うん。(秋江に) じゃあ、お願いします。

秋江、グラスを持って挨拶を始める。

秋江 大友、麻衣子、結婚おめでとう。

大友 ありがとうございます。

秋江 お前、うち来たの何年前だったっけ。

大友 三十のときだから、……十五年前ですね。

秋江 十五年前か、早いな。経営の才能もないのに、制作会社立ち上げようとして失敗して。大友 飲んだくれて、ふらふらしてるくらいなら、うちに来いって社長が言ってくれたんですよ。ね。上質な社会派のドキュメンタリーつくらしてやるからって。

秋江 そんなこと言ったっけ。

大友 言いましたよ。俺が旅番組とか動物ものは嫌だって言ってたから。

秋江 そうそう。信じられないでしょ。旅番組だって大事な仕事なのにさ。

大友 今はやりますよ、なんでも。

秋江 (笑う) まあでも、こいつが頑張ってくれたおかげで、うちもドキュメンタリー専門の制作会社として地位を保ってこられたような気がします。ほんと生意気で。酔っ払う度に「ドキュメンタリーってなんなんですか。」なんて絡んできてさあ、もつと大人になれって何度言ったかわかんないけどな。麻衣子も苦労するだろうけど、困ったことがあったら助けてやるから、いつでも言ってくるように。

麻衣子 ありがとうございます。

秋江 じゃあ、二人の結婚と、生まれてくる命に……

庸子が入ってくる。

庸子 ただいま。

みんなの視線が庸子に集まる。

庸子 え、なに。

麻衣子 お姉ちゃん、裏から入ってって言ってるでしょ。

庸子 ああ、ごめん。飲み会だった。

谷 二人の結婚のお祝いです。

庸子 そうなんだ。

麻衣子 そんな大げさなもんじゃないんだよ。打上げのついでにちょっと祝ってくれてるだけ。

お姉ちゃん夜勤だと思ってたから……。

庸子 休み取ったの。やりたいことあって。

雅彦 お姉さんも一緒にどうですか。

庸子 わたしはいい。

雅彦 でも。

庸子 呼ばれてないもん。のど渴いた。一本ちょうだい。(テーブルのビールを取り開けて) かんぱい。(と、飲む。)

雅彦、谷、つられて飲む。

麻衣子 ちょっと。

庸子 え、なに。

麻衣子 乾杯まだ。

庸子 ああ、ごめん。

秋江 もういいよ。やめよう。

大友 もう一回。もう一回やりましょう。

秋江 いいいいい。(と、酒を飲む。)

大友 ……。

雅彦 まあいいじゃないですか。飲みましょう。ね。

一同 ……。

麻衣子 ごめん、今日は打ち上げも兼ねてるから(奥に行つて)。

庸子 はいはい。もう退散します。

雅彦 結婚のお祝いなんだから、お姉さんもいてもらおうよ。

麻衣子 藤田くんは黙つてて。

雅彦 そうはいかないよ。ここに住んでるのに誘わないなんておかしいだろ。

庸子 いいよ、私は。別に。

雅彦 いや、よくありません。お姉さんはここにいてください。

俊子、来る。

俊子 麻衣ちゃん。

麻衣子 俊子さん、どうしたの、こんな時間に。

俊子 うちの娘の旦那がね、さつき帰つてきて、ここでなにかパーティーの準備してたつて言うもんだから、これは結婚のお祝いじゃないかってピンときて。

麻衣子 これ、違うの。ちゃんとした結婚式はそのうち、子ども生まれてからゆっくりやることにしたから、とりあえずっていうか。

俊子 とりあえずでもなんでも、結婚のお祝いでしょ。

麻衣子 それはそうんだけど。

俊子 だったら私も顔出さないとって。

麻衣子 そんないいのに、わざわざ。

俊子 だって、あんたたちの母親代わりっていったら、私しかいないでしょ。こんな小さい頃から知ってるんだから。

麻衣子 それはそうんだけど。

俊子 庸子ちゃん、久しぶり。まだタクシーやってんの。

庸子 この仕事気に入つてて。

俊子 しょうがないねえ。せめて日中の勤務にすればいいのに。そのビールもらつていい。

雅彦 どうぞ、どうぞ。飲んでください。遠慮しないで。

麻衣子 藤田くん。

雅彦 いいだろ、人数いたほうが。(大友に)ねえ。

大友 もちろん、どうぞ、どうぞ。

俊子 あんたがお相手。

大友 大友です。ご挨拶が遅れまして。

俊子、雅彦を見る。

雅彦 なんですか。

俊子 (無視して) で、みんな、その制作会社の人。

麻衣子 社長と、(谷を指し) 後輩。

秋江 どうも。

麻衣子 (秋江に) 母がやってたときからの常連さんで、中村俊子さんです。

雅彦 駅前のカプセルホテルのオーナーさん。

秋江 ああ。

俊子 (サービス券を配り) はい、これサービス券。

雅彦 あ、それ有効期限今月一杯のやつでしょ。

俊子 まだ十日も使えるよ。(秋江に) 終電逃したら使ってね。女性専用フロアもあるから。

秋江 (受け取り) ありがとう。

麻衣子 ちょっと、社長はカプセルホテルなんか使わないよ。

俊子 なんかとはなによ、なんかとは。

秋江 いいよ、若い子らに使わせるから。サービス券、もつとないの。

俊子 (サービス券を渡しながら) さすが、話がわかるねえ。

秋江 会社立ち上げたばかりの頃は私もよく行ったから。

麻衣子 そうなんですか。

秋江 全然帰れなかったからね。二時、三時まで仕事してたのに、早朝からロケとか。

麻衣子 旦那さんと立ち上げたんですよね。(俊子に) すごいんだよ。旦那さん、まだ無名の

ディレクターだったんだけど、社長が才能見抜いて、育てたんだから。

秋江 私は別に。環境整えてやっただけだから。

麻衣子 みんな言ってますから、社長の力だって。(俊子に) もうね、会社立ち上げたとたん、

いくつも大きい賞取って。

俊子 へえ。すごいね。

麻衣子 知らないかな。インドでの子ども臓器密売追ったドキュメンタリー。かなり話題に

なったんだけど。(秋江に) なんていいましたっけ、番組タイトル。

大友 麻衣子。

麻衣子 え。

秋江 いいよ、別に。なんだったけね、タイトル。

麻衣子 え、なに？

大友 明夫さん、もううちにいないから。

麻衣子 うそ、え、だって。

秋江 知らなかったんだ。もう五年になるかな。

麻衣子 でも、どうして。

秋江 女作って、会社の金に手出したから、追い出した。

麻衣子 ……。

庸子、思わず笑い出す。

麻衣子 お姉ちゃん。

秋江 (苦笑いして) ほんと笑っちゃうよね。

庸子 ああ、ごめんなさい。違うんですよ。(と、笑いを堪えようとする。)  
社長さんのこと笑ってるんじゃないかと。麻衣子が……。 (と、笑う。)

秋江 ……私、そろそろ帰るわ。

麻衣子・大友 ええ？

秋江 仕事残してきてんのよ。フジの制作局長から急に仕事振られちゃって。

麻衣子 すみません、社長。姉がほんとに。

秋江 違う違う。まじで気にしないで。

大友 でも社長……。

秋江 明日仕事頼みたいんだけどいいかな。

大友 大丈夫です。朝一で時間取ります。

秋江 うん、頼んだ。

秋江、帰る支度をする。

佐々木がワインを何本か抱えて帰ってくる。

佐々木 ただいま。あれ、社長なにやってんすか。

秋江 ああ、いいの買えた。

佐々木 はい。店の親父に選んでもらって。

秋江 あっそ。じゃ、あとは楽しんで。お先に。

佐々木 は。いや、あの。

秋江、出て行く。

佐々木 なんなんすか。なんなんすか。

大友 送ってくる。

大友、秋江の後を追って出て行く。

佐々木 俺も。

佐々木、ワインをテーブルに置き、出て行く。

気まずい沈黙。

麻衣子 悪いんですけど、今日はもうお開きにしてもらってもいいですか。

谷 ……片付け手伝います。

俊子 そうだね、これひとりで片付けるの大変だろうから。

麻衣子 いいです、そのままです。明日店休みですから、今日はもう。

谷 ……じゃあ、私たちはこれで。

俊子、谷、出て行く。

庸子、テーブルの上のワインを袋から出して物色している。

雅彦も、出て行くこうとする。

庸子 これ結構いいワインだよ。飲んでいい？

麻衣子 ……。

庸子 あの、藤田さんでしたっけ。一緒に飲んでくれませんか。

雅彦 いや、でも。

庸子 一人じゃ飲みきれないし、この子妊婦だし。

麻衣子 ちょっと。

庸子 女性法廷見ましたよ、ニュースで。あの番組つくるんですよ。すごいね。

麻衣子 お姉ちゃん。

庸子 なに、飲んじゃいけないの。

麻衣子 どうしていつもそうなの。少しは空気読んでよ。

庸子 ……私、ここ出て行くわ。ひとりで暮らす。

麻衣子 は。なに言い出すの。

庸子 空気読んでつもりなんだけど。

麻衣子 そんな空気出してないでしょ。

庸子 そう。ごめん。(雅彦に) これ開けてくれません。

雅彦 はあ。

庸子 お願い。

雅彦、ワインを受け取る。

麻衣子 どうして出て行くの。

庸子 そういう空気じゃないんですよ。

麻衣子 いいから。どうして出て行くの。

庸子 だってあんた結婚するんですよ。ふたりがここに住んだ方がいいじゃない。この店だつてあるんだし。

麻衣子 彼はお姉ちゃん一緒でもいいって言ってるよ。

庸子 やだよ。新婚夫婦と一緒になんて。

雅彦 (開けたワインを差しだし) これ。

庸子 ありがとう。

庸子、ワインを受け取り、ふたつのグラスにワインをつぎ始める。

雅彦 あ、俺はもう。

庸子 いいでしょ、お願い。

雅彦 ……。

麻衣子 ……ひとりになっちゃうんだよ。

庸子 別にいいよ、ひとりでも。(と、グラスをひとつ雅彦に差し出す。)

麻衣子 ひとりじゃ食事作る気にもならないって言ってたじゃない。

庸子 今日、部屋探してきたから。

麻衣子 忘れられないんだよ。お姉ちゃんが痩せてく姿。

庸子 ありがとう、心配してくれて。あの時は、あんたがここで一緒に暮らそうって言うてくれて助かった。でももう大丈夫、ちゃんと食べるから。あの子と住んでたアパートね、また空いてるんだって。部屋はリフォームされちゃってるけど、窓から見える河原はあの時のままだし。

麻衣子 あんな荒れた河原のながいいの。

庸子 虫がいるし、春になれば花も咲く。あの子ナズナが好きでね、ぺんぺん太鼓つくってあげたら喜んじゃって……

麻衣子 そういうの、もうやめてよ。

庸子 ……

麻衣子 花ならここでも咲いてるでしょ。

庸子 ペチュニアは好きじゃない。

麻衣子 なんで。

庸子 いつも綺麗に切り揃えられて、従順で。なんか監視されてるみたい。ペチュニアの原種はね、もつと背の高い、白い花なんだって。そっちのほうがずっといいと思わない。南米に行ったら咲いてるらしいの。だから……

麻衣子 私が監視してるって言いたいの。

庸子 そうじゃないよ。

麻衣子 ……お姉ちゃん、私のことどう思ってる。

庸子 お母さんみたいなこと言わないでよ。

麻衣子 なによ、それ。

庸子 しょっちゅう「お母さんのこと好き？」って聞いてきたじゃない。そこ(カウンターの中)でコーヒー入れながら。私うまく答えられなくて、あの質問されるのほんとに嫌だった。

麻衣子 覚えてない。

庸子 あんたはうまく答えられてたもんね。

麻衣子 ……

庸子 私が暮らす場所は、私が決める。

麻衣子 もういい、わかった。……使ったグラス下げといてね。

麻衣子、部屋に入る。

雅彦 いいんですか。

庸子 いいよ。

雅彦 ……

庸子 座って。そんなとこに立ってないで。

雅彦 はあ。(と、いいつつ座らない。)

庸子 法廷のこと教えて。

雅彦 (少し考えて) 壮絶でした。

庸子 死者の声。

雅彦 え。

庸子 死者の声は聞こえた？

雅彦 ……。

庸子 そんな目で見ないでよ。死んだ人の声、聞いたことないの。

雅彦 すみません。

庸子 気配みたいなもの感じることはあるでしょ。

雅彦 気配、ですか。

庸子 たとえば、空気の暖かさとかにおいがどこか懐かしくて、昔のある一日をどうしても思い出しちゃうようなこと。

雅彦 ああ。あります、それなら。

庸子 そういうとき、死者がその目を思い出してって言ってると思わない。

雅彦 ……いやあ、別に。それが法廷で聞こえるんですか。

庸子 だって彼女たちはたくさんの女が死んだのを見てきたんだもん。自分の想いだけであそこ立ったわけじゃないでしょ。

雅彦 ああ。

庸子 この世界じゃ生きている人より、死んでいる人のほうがずっと多いんだよ。テレビ局に保管されてる映像だって、撮った人間も、映ってる人間も、ほとんどはもう死んでるでしょ。私たちは自分で思ってるよりずっと死者たちの声に動かされてる。

雅彦 そりゃまあ、そうですね。

庸子 美希。私の娘。いまはもういないけど。七年前に肺炎で。まだ八歳だった。あの子がいなくなつたあと、周りの人と話すのが辛くてね、死者の声を探し回った。ある時ね、車検ださないといけなくて、グローブボックスに入れてた車検証出してみたら、あの子が書いた年賀状が挟まっていた。私の母親にあてた年賀状。何度か、母を病院まで連れて行ってたから、その時母が入れたんだと思う。こんなのが届いたよって、死んだ母が言ってるんだと思つたら胸がいつぱいになつちゃって。だって、母はあの子がいなくなる二年も前に死んだんだよ。なのに、それまで一度も母の声なんか聞こえてこなかった。美希がいなくなるまで、一度も。

雅彦 ……。

庸子 ごめん、わかんないよね。

雅彦 あの、麻衣子さん心配してるんですよ、あなたのこと。

庸子 わかつてる。

雅彦 一緒に育てたらいいじゃないですか。麻衣子さんの子ども。そしたらあなただって。

庸子 気が紛れる。

雅彦 いや、そうじゃなくて。

庸子 そう思う。私も。

雅彦 すみません、帰ります。ごちそうさまでした。

雅彦、出て行く。

庸子、ひとりでワインを飲み続ける。

暗転。

二〇〇一年一月二十四日。夕方五時。

喫茶ベチュニア。

麻衣子がカウンターの中で洗い物をしている。

麻衣子は妊娠六ヶ月のお腹を抱えている。

俊子はカウンター席に座り、本を読みながらコーヒーを飲んでいる。

俊子 麻衣子の「マ」に敏也の「ヤ」でマヤ。

麻衣子 それじゃ女の子の名前みたいじゃない。

俊子 じゃあ、アサヤ。

麻衣子 無理に両親の名前から一字取らなくてもいいんじゃない。

俊子 でもこの字画いいよ。総画二十一画で吉。(本を読み)若い頃の苦労が糧になって、大

きく発展します。名誉と地位を手にするでしょう。

麻衣子 麻人(あさと)は。麻に人(ひと)って書いてアサト。

俊子 だめだよ。総画二十画で凶。幸せを得がたいために世捨て人のように生きる人も。精神

世界に没頭するでしょう。

麻衣子 精神世界って。

俊子 ねえ、庸子ちゃんどうしてる。

麻衣子 いま精神世界から連想したでしょ。

俊子 そんなことない。そんなことない。

麻衣子 部屋の中は一応片付いたみたい。荷物少ないしね。

俊子 ちゃんと食べてるの。

麻衣子 どうかなあ。昨日様子見に行ったときは焼きそば作って食べてたけど。

俊子 焼きそば。

麻衣子 美希が好きだったからって。

俊子 ああ。

麻衣子 週末はご飯食べに来ると思う。週末じゃなくなっちゃって、いつでも食べにおいでって言うてるんだけどね。どうせこっちもしばらく一人なんだし。

俊子 大友さんは。

麻衣子 会社に泊まり込んでる。例の女性法廷のドキュメンタリーが終わらないらしくて。

俊子 いつなの、放送。

麻衣子 来週って言うってたかな。

俊子 早くしないと生まれちゃうのにねえ。

麻衣子 大丈夫だよ。まだ六ヶ月……あ、いま蹴った。

俊子 ええ、ほんと。

大友を先頭に、森、谷が来る。

俊子 (大友に気がつき) いいところ来た。いま蹴った蹴った。  
大友 え。なんですか。

俊子 麻衣ちゃんのお腹。赤ちゃんが。ほら。

大友 ……すみません、いまちよつと。

俊子 ああ。

麻衣子 いらっしやいませ。

大友 (テーブル席を指し) ここでいいですか。

森 どこでも。

大友 (谷に) 座って。

谷 ……。 (と、座る。)

大友 (席に着き、森に) なんにします。

森 僕ブレンドで。

大友 谷は？ ブレンドでいい。

谷 はい。

大友 ブレンド三つ。

麻衣子 はい。

麻衣子、水とおしぼりを三つずつ出す。

麻衣子、カウンターに戻り、ブレンドを用意し始める。

大友ほんと、すみませんでした。森さんの顔に泥塗るような真似して。

森 いや、まあ。それは、ね。

大友 第三夜は、藤田にちゃんとやらせますから。

森 うん。頼むよ。

沈黙。

森 藤田さんは。

大友 空港から直接社に向かっています。

森 空港。

大友 アメリカ行ってたんですよ。向こうの更生プログラム作ってる団体の取材許可取れて。

森 ああ、少年犯罪の。

大友 もう3年越しで追ってますから。

森 そうなんだ。

大友 さっきメールあったから、もう会社着いてるんじゃないかな。

森 話してあるの、状況は。

大友 (谷に) メールはしたんだろ。

谷 はい。

森 なんて言ってた。

谷 ……納得できないって。

森 そりゃそうだよなあ。  
大友 大丈夫ですよ。あいつだって子どもじゃないんだから。  
森 うーん。

麻衣子、ブレンドを三つ出す。

森 更生プログラムってどんななの。  
大友 え。

森 アメリカの少年犯罪。

大友 グループに分かれて、ひとりずつ話すみたいですよ。小さい頃のこととか、辛かったこととか。

雅彦、駆け込んでくる。

雅彦 どういうことですか、降りたって。

大友 なんだよ、いきなりでかい声だして。

雅彦 どういうことなんですか、説明してくださいよ。

大友 わかった、落ち着けよ。会社行こう。ここじゃんだから。

雅彦 (俊子を見て)別に聞かれたっていいでしょう。早く話してください。

麻衣子 俊子さん、ごめん。今日ちよっと、これで。

雅彦 いいよ。帰ってもらわなくて。

俊子 でも私もう帰んなきゃ。掃除しないと。怒られちゃう。

麻衣子 ごめんね、俊子さん。

俊子 いいよいいよ。また明日来るから。(財布から金を出し)はい、五百円ね。

麻衣子 ありがとうございます。

俊子 はいはい。失礼しました。

俊子、帰って行く。

大友 座れよ、立ってないで。ブレンドでいいか。

雅彦 はい。

大友 ブレンド。

麻衣子 はい。

雅彦 第二夜、降りたってほんとですか。

大友 ああ、第二夜に関しては、うちのスタッフは外してもらって、俺個人の名前だけ出すことにした。谷も白川も今日で番組外れてもらう。

雅彦 MHKの指示ですか。

大友 こっちからそうさせてくれって頼んだんだよ。

雅彦 どうして。

谷 私が頼んだんです。年末から徹夜が続いて、もう体力の限界で。  
雅彦 ……。

森 いい番組だったのに残念だよ。

雅彦 説明してください、なにがあったのか。

森 先週急に高崎部長が試写するってことになってね。

雅彦 聞きました。なんでそんなことするんですか。部長試写なんて普通やらないでしょ。

森 知らないよ、上が決めたことなんだから。

雅彦 だけど、急に出てきて、企画意図と違うって言われたって。

森 そんなもんじゃない。激怒だよ、激怒。修正不可能、お前らにハメられたって。

雅彦 それおかしいでしょう。去年から何度打合せ重ねてきたと思ってるんですか。三田村さんも木村さんも、かなり細かいところまで指示出してきてたんですよ。こっちはそれに従って修正してきたのに、今更そんなこと言われたって。

大友 教養部の部長が直々に出てきたんだ。しょうがないよ。

雅彦 三田村さんは黙ってたんですか。そこを説得するのが三田村さんの仕事でしょ。

森 三田村さんだって、まさか全否定されるとは思ってたと思うよ。試写が始まるまで、

「これだけ頑張ったんだから大丈夫でしょう。」なんて言ってたんだから。

雅彦 いやだから……。

麻衣子 失礼します。

麻衣子、ブレンドを出す。

雅彦 それでその部長の指示は、具体的にはなんだったんですか。

大友 なかったんだ、指示は。

雅彦 なかったって。

大友 とにかく駄目だ。法廷との距離が近すぎる。それだけ言って帰った。

雅彦 そんな。

森 しょうがないから残ったスタッフで話し合ったよ、遅くまでね。

大友 その時点で「法廷だけでいく」っていう方針は変更。海外の新聞記事を紹介して、法廷が海外でどう受け止められているかを押し出すことになった。谷と白川が徹夜で修正して、次の日には、修正版を三田村さんたちに見てもらった。森さんもいましたよね。

森 うん。かなり良くなったと思った。みんな喜んでたし。

大友 作業はその方向で進められた。だけど次の日、高崎部長からの通告として、さらなる修正を指示された。国際実行委員の日本代表、赤坂あきみさんのインタビューをはずすこと。

「天皇有罪」の発表シーンを削ってナレーションに変えること。

雅彦 そんな修正、意図がわからない。説明求めなかったんですか。

大友 求めたよ。谷も、俺も。

雅彦 それでどういう。

大友 業務命令だって。それ以上はなにも……。

雅彦 ……。

大友 谷も死にもぐるいだった。要望に応えようとして必死に頑張った。そして今日、二度目の部長試写をむかえた。でも……

雅彦 そこでもOKは出なかった。

大友 「まったく変わってない。」って言われたよ。「このまま出せば、みなさんとはお別れ

だ。もう二度と仕事はしない。これじゃ出来レースだ。」

雅彦 出来レース？ どういう意味ですか。

大友 さあ。

雅彦 その人思想的にあれなんじゃないですか。だから出来レースなんて。

森 いや、それはないよ。高崎部長のことは俺もよく知ってるけど、そんな人じゃない。社会派のいい番組もたくさん作ってる人だし。

雅彦 圧力でもかかってたとか。

森 ないない。そういうことがあったら、多少はこっちにも噂が入ってくるもんだよ。そういうんじゃないよ、単に高崎部長の好みに合わなかったんだと思う。あの人、もっと歴史の皮肉みたいなのが好きだから。

雅彦 歴史の皮肉。

森 そうそう。長い年月が経ってしまつて、責任者を特定するのも難しいし、裁くための「ものさし」もはっきりしない。そういう中で戦争犯罪を裁くのがいかに難しいか。そこにどれだけの苦悩があったのか。みたいなき。

雅彦 そんな典型的なストーリーの型にはめたら、今回のメッセージは伝わらない。

森 まあね、でもちよつと一本調子だったのは否めないだろ。

雅彦 そんなありふれたストーリーより、あの証言はずつと力があつたでしょ。森さんだつて、圧倒的だつて言つてたじゃないですか。

森 そりゃそうなんだけどさ。

谷 ……あの人は証言を否定したいんです。

森 え、なに。

谷 高崎部長言つてました。「加害者証言やつてるオヤジさん達、なんかうさんくさいんだよね。恥をしのんで証言してます、とかなんとか言つて、しょっちゅういろんな所で発言してんじやねえの。どうせ、あの団体のやつらだろ。」つて。木村さんが「中国帰還者の会です。」つて言つたら、「ああ、やつぱり。そんなこっちゃないかと思つたよ。」つて。

森 あれはさ、まず疑つてみないとつて話して。

谷 中国帰還者の会だつたらなんだつていうんですか。

森 だから、それはさあ……

谷 なのに高崎部長がそう言い出したら、前の試写のときは、「ラディカルで刺激的だ。」つて言つてた人まで「確かにあの発言は違和感あつたよなあ。」なんて言い出して。

森 だから。トラウマがあるのよ、あの人は。言つてたろ、北朝鮮で「慰安婦」の取材したとき、「慰安婦」だつて名乗る女にだまされて、酷い目にあつたつて。

谷 だから、法廷の証言も嘘だつて言うんですか。

森 ……

谷 高崎部長がだまされたことと法廷はまったく関係ないでしょう。なのに、ひどいです。三浦サキさんの発言にまで文句つけて。

雅彦 え、文句つて。

谷 「あのスタジオゲスト誰。アメリカの大学の偉い人かもしれないけど、圧倒されるとか沈黙するとか、いったい何なの。全体的に彼女の発言いらんんじゃないの。」

雅彦 なんなんだよ、それ。（と、水を倒す。）

森 （おしぼりを投げ）ああ、ああ。

大友 おい（おしぼり）。

麻衣子、おしぼりを持って来る。

麻衣子、森、大友が水を拭く。

雅彦 それで。三浦さんのコメントどうなったの。

谷 三浦さんぬきでスタジオ撮り直すことになりました。

雅彦 誰かそれに反対しなかったの。

谷 誰も。

雅彦 坂下先生の代わりに、三浦さんをスタジオゲストにオファーしようって言ったとき、みんな賛成したでしょ。フェミニズムの研究者として国際的な視座を持ってる人だった。

森 うん。でも確かにわかりにくい話ではあったよ。

谷 「慰安婦」にされた女性たちの証言に圧倒されて、その苦しみがわかるなんて簡単に言えなくて、沈黙してしまう。でもそのままでは駄目で、あの女性たちがものすごく苦しんで語ったことに応える姿勢が私たちには必要だって、それは、三浦さんが一番言いたかったことだと思うし、この番組のメッセージの根幹です。それがわからないって……。

森 ……そういうところじゃないかな。

谷 え。

森 高崎部長がこの番組から感じ取ったものだよ。

谷 そういうところって。

森 なんていうかさあ、正義を振りかざしてるように見えちゃうんだよな。

谷 ……正義って。

雅彦 谷はあの告発を自分のこととして受け止めたから……

谷 やめてください。いいです、もう。

森 僕がそう思ってるわけじゃないよ。今回の番組はあれでよかったと思ってるし。でも、どんな正義も百パーセント正しいとは限らないっていうかさ、見方を変えてみたら違う面が見えてくることもあるんだよ。高崎部長もそういうことが言いたかったんじゃないかな。

谷 （絶句）……。

麻衣子、新しいおしぼりと水を持って来る。

麻衣子 全部替えちゃいますね。（と、水を交換する。）

森 ああ、ありがとうございます。

大友 とにかく、もう無理だと思ったんだよ。こっちは慰安婦の女性たちの声を聴くっていう所からスタートしたわけだから。そこが違うっていうんじゃないでしょうもない。

雅彦 三田村さんはなんて。

大友 わかったって。

雅彦 庇ってくれなかったんですか。

大友 うーん……

森 やっぱりわだかまりが残ってたんじゃないかな。

雅彦 わだかまりって。

森 いや、まあね。

雅彦 なんですか。教えてくださいよ。

谷 ……怒らせちゃったんです、私が。試写の前の打合せで。

大友 もういいよ、そのことは。

谷 部長試写の前に、映像確認したっていうんで見せたんです。それで。

雅彦 なにかあったの。

谷 カットするはずだったシーン、落とすの忘れてて。

雅彦 え、なんで。

谷 疲れてて、つい。

雅彦 ついって。

谷 よく覚えてません。疲れてて。

雅彦 どのシーン。

谷 天皇が有罪を言い渡されるところです。

雅彦 それって……。

谷 疲れてたんです、ほんとに。

雅彦 ……。

谷 すみません。

雅彦 ……。

大友 (谷に) お前もういいぞ。疲れてるんだろ、明日も休め。

谷 はい。そうします。(と、財布を出す。)

大友 いいから、早く帰れ。

谷 失礼します。

谷、立ち上がり、帰ろうとする。

雅彦、扉まで送る。

雅彦 大丈夫。ごめんな。

谷 ……もういいです。ごめんなさい。逃げちゃって。

雅彦 いや、いいよ。逃げて当然だよ。

谷 ごめんなさい。

雅彦 うん。

谷、出て行く。

森 うっかりはありえないと思うけどね。

雅彦 どういうことですか。

森 ね、そうじゃない？ 大友さん。

大友 ……。

森 新しい素材もつなぎこんであったらしいじゃない。文字つくって、ナレーション考えてさ。

そんなこと偶然には起きないでしょ。

大友 ……。

森 納得してないって言いたかったんじゃないの。

雅彦 納得できるわけじゃないですか。あの法廷は、日本政府や天皇の責任をちゃんと認定したことが国際的に評価されてたんでしょ。それを紹介できないなんて。

森 気持ちわかるよ。だけど、ああいうやり方しちゃったらさ。

雅彦 そりゃそうですね……。

森 彼女、ちよつと法廷に入れ込み過ぎちゃったんじゃないかな。

雅彦 ……。

森 僕らみたいな作り手は活動家とは違うからさ。あんまり頑なになられちゃってもね。

大友 すみません、ちよつと融通聞かないとがあつて。

森 ああ聞いた。前も取材対象怒らせたことあつたんだって。

大友 そんな大したことじゃなかったんですけどね。

森 いや結構大変だったって聞いているよ。業界狭いからそういうの気をつけないと。

大友 そうですね。

雅彦 俺もう行っていいですか。

大友 ああ、悪かったな。帰ってきたばかりで疲れてるのに。

森 第三夜は引き続きだから、よろしく頼むよ。

雅彦 いや、でも俺は……。

大友 大丈夫です。ちゃんとやらせますから。

森 第三夜は「国際公聴会」だから大丈夫だと思うけどね。

雅彦 どういうことですか。

森 よその国のことだからさ。日本を裁くんじゃなければ全然問題ないでしょ。

雅彦 でも、国際公聴会は女性法廷からの流れで語らないと。

森 いや、そこは切り離していこうよ。

雅彦 でも。

大友 そうですね。切り離していきましょう。女性法廷は第二夜でたつぷりやるんだから。

雅彦 大友さん……。

大友 また口出されたんじゃやっつけられませんかね。第三夜は死守していきましょう。

森 頼んだよ、大友ちゃん。第二夜の素材はMHKの方に届けといてね。

大友 はい。

森 じゃ、帰るから。お会計。

麻衣子 二千元です。

大友 あ。(と、財布を出そうとする。)

森 いいからいいから。領収書ちょうだい。

麻衣子 はい。

森が料金を払い、麻衣子が領収書を渡す。

森 (領収書を待つ間に) で、アメリカはどうだったの。

雅彦 どうって、

森 少年犯罪の更生プログラム撮ってきたんでしょ。いい絵取れた。

雅彦 ええ、まあ。

森 グループに分かれて話し合うんだってね。今度詳しく聞かせてよ。興味あるから。

雅彦 はあ。

森 じゃあ、大友ちゃん、また。

大友 はい。今日はほんとすみませんでした。

森 出て行く。大友、たばこを吸い始める。

麻衣子 たばこ、やめてよ。

大友、たばこを消す。

麻衣子、谷と森のカップを下げる。

雅彦、大友を見ている。

大友 ドキュメンタリーってなんなんだろうな。

雅彦 ……。

大友 ときどき思うんだよな。作品が時代を映す鏡だとしたら、いろんな事情でうまくいかなかった作品も、うまくいかない時代を映してるんじゃないかって。

雅彦 時代のせいですか。

大友 責任転嫁だな。わかってるよ、お前が言いたいことは。

雅彦 どうするつもりなんですか、第三夜。

大友 女性法廷と切り離しても、お前が伝えたかったことは伝えられる。

雅彦 紛争地の性暴力を人ごとみたいに伝えたいわけじゃない。

大友 わかっている。でも四回シリーズの連続した流れのなかでやるんだ。この問題をどう捉えているのかわかる人にはわかる。真っ向からぶつかると。うまくやれ。

雅彦 切り離せばいいんですか。

大友 お前はつまらないことで突っ込まれるようなものは作らない。信用してる。

雅彦 ……一箇所だけ。赤坂あきみさんが映り込んでいるところがあります。

大友 ああ、国際実行委員の。

雅彦 ウーマンライツの代表です。

大友 ひっかかるかもな。

雅彦 ナレーションの背景なんで、ブローアップすればカットできます。

大友 いいのか。

雅彦 どうせチェックが入ればカットされますから。

大友 わかった。お前に任せる。

雅彦 はい。

大友 どうだこれから一杯。

雅彦 もどってすぐ編集始めないと。

大友 そうだよな。

雅彦 じゃあ、俺はこれで。

雅彦、出て行く。

大友、イライラとたばこに火をつける。  
麻衣子、大友を見つめる。

暗転。

4

一週間後。二〇〇一年一月三十日。夜十一時。

喫茶ベチュニア。

店は閉店している。電気の消えた店内。

カウンターの奥の部屋から明かりが漏れている。

テレビの音が聞こえる。

扉を叩く音。かなりしつこく叩き続ける。

テレビの音が消え、奥の部屋から麻衣子が出てきて扉をあける。

雅彦が入ってくる。

麻衣子 藤田くん。

雅彦 大友さんは。

麻衣子 まだだけど。

雅彦 そう。

麻衣子 会社と一緒に観てるのかと思ってた。

雅彦 いや……

雅彦、携帯を出して、大友に電話をかける。

留守番電話。雅彦、電話を切る。

雅彦 行きつけの店とか知ってる。

麻衣子 さあ。

雅彦 ……

麻衣子 待つてれば。もう帰ってくると思うから。

雅彦 いや、でも。

麻衣子 お姉ちゃん来てるの。よかったらご飯食べてって。

雅彦 そういう気分じゃないんだ。

麻衣子 女性法廷のこと。

雅彦 見たの。

麻衣子 うん。いま、お姉ちゃんと。

雅彦 録画した。

麻衣子 したよ。大友さん帰ってから観るかもしれないから。

雅彦 ……帰って来ないかもしれないよ。

麻衣子 え、どうして。

雅彦 見たんだろ。

麻衣子 見たけど。なに。どういうこと。

雅彦 第二夜がああなってるって知って、逃げたのかもしれない。

麻衣子 まさか。そんなわけないでしょ。

雅彦の携帯が鳴る。

雅彦、携帯電話の通知を見る。

雅彦 大友さんだ。

麻衣子 ほら、逃げてないじゃない。

雅彦、電話に出る。

雅彦 はい。……しました。……わかってるでしょ、なんの話か。……見ましたよ、会社で。なんなんですか、あれは。全然別物じゃないですか。ちゃんと説明してくださいよ。……いまどこにいるんですか。俺すぐ行きますから。……いま……。ペチュニアです。……わかりました、待ってます。

雅彦、電話を切る。

庸子、雅彦の声を聞いて店に出てくる。

雅彦 ここで待ってろって。

麻衣子 いまどこだって。

雅彦 さあ。

麻衣子 なんか飲む。

雅彦 いや、いい。

麻衣子 第二夜、降りたんじゃなかったの。

雅彦 降りたよ。

麻衣子 でもドキュメンタリートークョーって名前出た。

雅彦 ああ。下請けには降りる自由もないんだな。

麻衣子 ……。

雅彦 あんな番組つくったと思われたらおしまいだよ。

麻衣子 そこまでひどくなかったと思うけど。

雅彦 本気かよ。あんなひどい編集初めて見たよ。四四分の放送予定が四〇分になってんだぜ。

冒頭でイントロ画像三分も流して穴埋めして。あんなの放送事故の域だろ。

麻衣子 視聴者はほとんど気がつかないから。

雅彦 気がつくよ。なにか異常なことが起きたんだって必ず気づく。あの番組はおかしい。女性法廷を紹介してるのに、誰が、誰を起訴した法廷なのか。どんな団体が、どんな経緯で法廷を開催したのか。どんな判決が出たのか。いや、そもそも判決は下されたのか。それがなにもわからないんだぞ。肝心なところが全部カットされてる。証言の途中で倒れた万さん

の言葉も、「笑うがいい。恥ずかしくなんか無い。」って言ったエスメラルダさんの表情も、加害兵士の告白も、ぜんぶ消されちゃった。スタジオ部分なんて、あれなんだよ。三浦さんのコメントなんかズタズタじゃねえか。あれじゃ俺だって意味わかんねえよ。大体あの学者はなんなんだよ。延々否定的なことしゃべりやがって。あんなの嘘ばかりじゃねえか。麻衣子 わかった、わかったから大きい声出さないで。

雅彦 ……とにかく俺たちが降りた時点のものとはまったく別物になってる。あんなものうちの名前出されたら終わりだよ。

麻衣子 ……

雅彦 さつき、三田村さんにメールした。

麻衣子 三田村さんってMHKの。

雅彦 今日の第二夜ひどかったって。

麻衣子 なんでそんなことすんの。

雅彦 第三夜にこれ以上手を入れて欲しくなくて。

麻衣子 だからって。

雅彦 逆上すると思うだろ。でも三田村さんにも言い返してこなかった。

麻衣子 なにも。

雅彦 すぐ返事がきて、「引き裂かれる思いです。」って。

麻衣子 どういうこと。

雅彦 なにかあったんだ。MHKの内部でなにか。

麻衣子 なにかって。

雅彦 わからない。でも右翼の攻撃がひどくなってるのは確かだ。MHKの社屋に迷彩服の男たちが三十人くらい乱入してきたらしい。三田村さんの自宅も襲撃されるかもしれないから、警備してもらってるって。MHKの上層部がそういう脅しに屈したのかもしれない。

麻衣子 そんな、まさか。

雅彦 なにか大きな力が働いてる。そうじゃなかったら、三田村さんがあんなに弱ってるはずない。

麻衣子 ……

雅彦 ……第三夜もきつとめちやくちやにされる。

麻衣子 大丈夫。第二夜とは違うよ。

雅彦 完パケして納品したと思ったら、夜になって突然直しの指示が入った。完パケした後だぞ。理由も説明しないで直せなんてありえない。

麻衣子 拒否したんだってね、修正するの。そうやってことを荒立てるから。

雅彦 直す理由を説明してほしいって言っただけだ。でも取り合ってもらえなかった。滝さんたちにもなだめられて、ぎりぎり譲れる範囲内で修正した。だけど「半端な直し方は直したことにならない。」って突き返されて。

麻衣子 結局大友さんが修正したって言った。

雅彦 見損なったよ。もつと骨のある人だと思ってた。

麻衣子 大友さんは藤田くんの代わりに修正したんだよ。

雅彦 そんなこと頼んでねえよ。

麻衣子 大友さんは藤田くんのために。

雅彦 俺のため。

麻衣子 これ以上拒否したら、藤田くんがいられなくなると思っ

雅彦 第二夜みたいにならずたにされるくらいなら、やめた方がましだよ。

麻衣子 ずたずたにされないためにやったんでしょ。修正を拒否したらそのまま放送してもらえるところも思ってるの。

雅彦 ……。

麻衣子 大友さんがやらなくなっちゃって、MHKの人がやるだけだよ。そしたらもっと酷いことになる。だから大友さんやっただよ。責任者は俺だからって。

庸子 麻衣子。

麻衣子 え。

庸子 もうやめなよ。

麻衣子 お姉ちゃんには関係ない。

庸子 あんたにだって関係ないじゃない。

麻衣子 ……。

庸子 その人、やれなかったんじゃない。やらなかったんだよ。

麻衣子 だからなに。

庸子 その人のせいにしたら可哀想じゃない。

麻衣子 なに言ってるの、そんなこと言ってるじゃないでしょ。

庸子 (雅彦に) どうしたいの。

雅彦 え。

庸子 なにか考えがあつて来たんじゃないの。

雅彦 いてもたってもいられなくて、大友さん聞いたですつもりで。

麻衣子 やめてよ。大友さんずっと寝てないんだよ。

雅彦 俺だって寝てないよ。

麻衣子 もういいじゃない、そんなに大ごとにしなくても。第二夜は放送されちゃったんだし、第三夜だって今日の明日じゃどうにもならないでしょ。

雅彦 これだけじゃ終わらない。

麻衣子 どうして。

雅彦 昨日と一昨日、知り合いに片っ端からメールだった、番組を見てももしもおかしいと思っ

たらMHKに電話してくれて。

麻衣子 ええ。

雅彦 結構な人数が拡散してくれてる。たぶんちよつとした騒ぎになってると思う。

麻衣子 どうしてそんなことしたの。

雅彦 なにかの力が働いてるなら、ひとりじゃ闘えないだろ。

麻衣子 だけど。

雅彦 番組におかしいところがなかったら、それはそれでいいと思った。いい番組だと思っ

たらそう言ってくれればいいんだし。

麻衣子 ……この業界にいられなくなるよ。

雅彦 ……わかってる。

庸子 闘うんだね、あなたは。

雅彦 ……ああ。

庸子 わかった。じゃ、私電話する。

麻衣子 お姉ちゃん。

庸子 ビデオもダビングして配る。あとなにすればいい。

麻衣子 ちよつとやめてよ。なんでそんなことするの。

庸子 おかしいと思ったから。あんたは電話しないの。さつきテレビ観ながらおかしいって言うってたじゃない。

麻衣子 私は関係者の妻なんだよ。お姉ちゃんだって家族でしょ。

庸子 だからこそだよ。家族がひどいめにあつてのにだまってるられない。

麻衣子 そうじゃなくて。ちよつとはあの人の立場も考えてって言うてるの。

庸子 立場。

麻衣子 あの人はただの社員じゃない。取締役なの。個人の考えじゃ動けない。会社の存続がかかっているんだよ。

庸子 なに言ってるの。

麻衣子 いつもいつも勝手なこと言ってる人にはわからないだろうけど。

庸子 なに、いつもいつもって。

麻衣子 いつもじゃない。この家さつさと出て行っちゃうし。

庸子 それはさんざん話し合つたでしょ。

麻衣子 それだけじゃない。お母さんの病気が再発したときだつて。

庸子 私なんか言つた。

麻衣子 言つたでしょ、この店潰した方がいいって。

庸子 ああ。

麻衣子 お母さんあとで泣いてたんだよ。

庸子 無理に働く必要ないと思つただけ。店に立ち続けるのしんどそうだったから。

麻衣子 お母さんにとってはこの店が生きがいだったの。

庸子 だから結局手伝つたじゃない。夜勤明けで疲れてるのに店掃除して、食器洗つて。

麻衣子 でもお母さんが逝つたらさつさとやめた。

庸子 当たり前でしょ。あんな生活続けられると思う。

麻衣子 私は会社やめて店継いだの。店潰したらお母さん悲しむし、お姉ちゃんだって帰つてくるところなくなっちゃうし。

庸子 あんたは会社やめたくなつてたんでしょ。給料安いし、やりたいことさせてもらえなくて。やめる口実ができたって喜んでたくせに人のせいにしないでよ。

麻衣子 なんでそういう言い方するの。

庸子 あんたが私のせいにするからでしょ。

麻衣子 ちよつとは感謝してくれたっていいじゃない。こっちは良かれと思つてやつてるのにいちいちいちいち否定して。美希も言つた。お姉ちゃんのそういうとこ……

庸子 そういうとこ、なに。

麻衣子 ……。

庸子 私のそういうところ嫌いって？

麻衣子 ……。

庸子 あんたはなんにもわかつてない。

麻衣子 なにをわかつてないって。

庸子 親を嫌いつていうのは特別なことじゃない。

麻衣子 ……。

庸子 親のすべてを受け入れないといけないなんて、そんなことないんだよ。

麻衣子 私はお母さんを信頼してるの。お姉ちゃんにはひねくれてるよ。

庸子 信頼。嫌いって言えなかったのは、親の愛情を信じられなかったからでしょう。

麻衣子 ……。

庸子 安心して嫌いって言うことが信頼するってことなんじゃないの。

麻衣子 ……美希はお姉ちゃんのこと信じてたっていいの。

庸子 そうじゃない。私、美希にいろんなこと我慢させた。あの子の父親と別れたあと、「お父さんまた来る」って聞かれて、「そのうちね」って答えた。それしか言わなかったのに、

あの子それ以来父親のこと一切言わなくなった。…私ちつともいい母親じゃなかった。

麻衣子 だったら黙っててよ。これはうちの問題なんだから、余計な口挟まないで。

庸子 そういうわけにはいかないよ。

麻衣子 どうして。

庸子 私、この人たちが描こうとした法廷を見たいんだよ。女たちが人としての尊厳を取りもどすところを。

麻衣子 ……。

庸子 (雅彦に) いまビデオ持って来るから。待ってて。

庸子、ビデオを取りに行く。麻衣子、後を追おうとする。

大友が秋江と一緒に帰ってくる。

雅彦 社長。

大友 悪い、遅くなった。

雅彦 どこにいたんですか。

大友 M H Kに行ってた。

雅彦 社長も一緒に。

大友 うん。

雅彦 なにかあったんですか。なんかあったんですよね。

大友 わからない。

雅彦 わからないって。

大友 三田村さん憔悴してたよ。高崎部長も打ちのめされてた。

雅彦 高崎部長も。

大友 とにかく右翼が来るかもしれないから、念のためうちも看板外して対策しとけて言われた。お前もあんまりひとりで行うろろするな。

雅彦 右翼なんですか。それだけでこんなことになってるんですか。

大友 わからないよ、俺にも。

雅彦 納得いかないんですよ。いくら右翼に攻撃されたからって、はいそうですかって直し入れたわけじゃないでしょ。M H Kの内部でなにかあったんじゃないんですか。

大友 なにかってなんだよ。

雅彦 腹立たないんですか。あんな風に番組ずたずたにされて。

大友 ……。

雅彦 もういいです。MHKに直接行って三田村さんに聞いてきます。

大友 ちょっと待て。会社に戻ってくれ。

雅彦 は。

大友 説明して欲しいことがある。

雅彦 ……。

秋江 MHKに抗議の電話が殺到しているんだ。

雅彦 そうですか。

秋江 怪文書が回ってるらしいんだよ、MHKに抗議の電話をしてくださっていう。

雅彦 ……。

秋江 何か知ってるんじゃない。文面から考えて、内部の人間みたいなんだけど。

雅彦 俺は…。

秋江 メール調べさせてもらってもいいかな。

雅彦 俺はただ抗議してくれて言ったわけじゃなくて…

秋江 言ったんだ、抗議してくれて。

雅彦 ……。

秋江 そのメール、放送系のメールリングリストに拡散した人がいてね。馬鹿だよ、その手のリストにMHKの人間が入ってないわけじゃないのに。偉いさんたちがカンカンらしいんだよ。こんな風に挑発するとはもう仕事しないって。

雅彦 確かにメールしました。でも挑発とかそんなんじゃない。あくまで番組を見て判断してくれて言っただけです。個人名も出してないし、悪口も書いてない。

秋江 「この国の民主主義はどうした！ 私はこれから修正をボイコットします。」

雅彦 ……。

秋江 ここまでは絶対にオフレコでお願いしますすって書いてあるのにね。よく読まずに転送しちゃうやつがいるんだよ。

雅彦 ……。

秋江 なんてこんなことした。

雅彦 ……なにか異常なことが起きてる。そう思ったから。

秋江 会社に迷惑がかかるとは思わなかったわけ。

雅彦 そんな余裕ありませんでした。

秋江 せめてメール出す前に私に言いなさいよ。

雅彦 言ったら止めるでしょ。

秋江 止められるようなことしたって自覚はあるんだ。

雅彦 内部の人間は聞えないでしょう。だから。

秋江 ……明日の第三夜、また直しが入ることになった。でも、うちにはもう頼めないって。あとはMHKの方で直すって言われたよ。

雅彦 そんなことさせない。

秋江 そうさせたのはあんたでしょ。

雅彦 だまって脅しに屈しろっていうんですか。

秋江 だから…。

雅彦 右翼の攻撃なんかに負けて恥ずかしくないんですか。

秋江 なんてそういう話になるんだよ。

雅彦 だってそういうことでしょ、そんな指示にだまって従えなんて。

秋江 黙って従えなんて言ってるじゃない。やり方を考えろって言ってるんですよ。

雅彦 ほかにどんなやり方があったっていうんですか。なにを言ったって無視されるのに。

秋江 大げさだよ。理不尽なことのひとつや二つ、いままでだってあったでしょう。

雅彦 そんなことない。ここまでおかしいことはありませんでした。

秋江 そうやって騒ぐから問題が大きくなるんだよ。

雅彦 違う。(大友に)ね、違いますよね。こんなこと今までなかったでしょ。

大友 ……

雅彦 大友さん言ったじゃないですか。マスメディアにとって権力を監視するのは大事な使命だって。なのに、なにが起きたのかさえわからないままうやむやにするんですか。誰がなんのために、どんな脅しをかけてきたのか知りたくないんですか。

大友 ……

雅彦 ねえ、大友さん。いいんですか、それで。

秋江 わかったから。会社来て。話聞くから。

大友 あの、やっぱりこいつのことは勘弁してやってもらえませんか。説明だったら俺がしますから。

秋江 そういうわけにはいかないよ。情報流したのは藤田なんだから。

大友 でも。こいつ巻き込んだの俺なんです。だから。

秋江 メールについて聞くのが先。(雅彦に)ほら、行くよ。

秋江、雅彦を連れて外に出ようとする。

大友、秋江の前に立ちほだかる。

庸子、ビデオテープを持って戻ってきている。

大友 ちょっと待ってください。

秋江 なに。

大友 お願いします。話聞いてください。お願いします。

秋江 どいて。

大友 退きません。お願いします。ちょっとでいいんです。話聞いてください。

秋江 どけて。

秋江、大友をどかそうとする。

大友、抵抗して、思わず秋江の腕を強く掴む。

秋江 痛っ。

大友 すみません。

秋江 さわるな!

大友 社長。

秋江 (腕をさすり)痛い……

大友 すみません。すみません。すみません。(と、秋江にすがりつく。)

秋江 ちよ、なに。放せ。放せて。

大友 すみません。（と、土下座したまま動かない。）

雅彦 大友さん……。

秋江 ……頼むから面倒くさいことさせないでよ。今回のことは、ちゃんと処分したってこと見せるしかない。わかるでしょ。

大友・雅彦 ……。

秋江 まったく。普通の会社じゃあるまいし、処分なんかしたこともないのに、どうしたらいいのかわかんないよ。

麻衣子 減俸とか謹慎とか。

秋江 え。

麻衣子 謹慎三日くらいだと思えます、普通の会社だったら。

秋江 ……そう。とにかくそういうことだから。

麻衣子 反省会。

秋江 え。

麻衣子 反省会も開きますよね。

秋江 まあ、そうだね。

麻衣子 だったらうち使ってください。大人数集まれる部屋ありませんよね。その日は貸し切りになりますから。

秋江 そう。

麻衣子 協力しますから。なんでも言ってください。なんでも。

間。

秋江 （雅彦に）行くよ。

雅彦 ……。

秋江 早く。

雅彦、表に出る。

大友、立ち上がれない。

秋江 （大友に）先行ってるから。

秋江、表に出て、雅彦を促して会社に戻る。

麻衣子、大友に駆け寄る。

麻衣子 いいんだよ。これでいいんだよ。敏也さんは悪くない。

大友 ……。

麻衣子 フリーじゃないんだから、組織の人間として我慢しなくちゃいけないことだってある。

藤田くんは大人げないよ。

大友 でも。

麻衣子 いいからもうなんにも言わないで。敏也さんはひとりじゃないんだから。（お腹にさわわり）ほら、わかる。蹴ってるでしょ。この子が生まれたら、私しばらくお店休まなくちゃ

いけない。敏也さんまで仕事なくなっちゃったら、私たちどうやって暮らしていけばいいの。私はいいよ。敏也さんといられるだけで、なんだって我慢できる。だけど、この子には苦勞かけたたくない。わかるでしょ。いまなにを大切にしないといけないか。わかるよね。

大友 ……。

麻衣子 ねえ、私のこと好き。

大友 ……。

庸子 やめてよ。

麻衣子 ……。

庸子 なにこれ。それじゃお母さんと同じじゃない。

麻衣子 お姉ちゃんはだまってて。

庸子 そんなことして、その人の尊厳傷つけて。暴力だよ、そんなの。

麻衣子 お母さんが暴力ふるったっていうの。

庸子 暴力だったじゃない。私のこと好き、私のこと好きって何度も聞かれて、上手く答えられないと無視されて。

麻衣子 女手ひとつで育ててたんだよ。お母さんがどれだけ不安だったかわかんないの。

庸子 わかってるよ。感謝もしてる。店がどんなに忙しくてもいつもちゃんとご飯つくってくれて。私お母さんの作る焼きそば大好き。

麻衣子 うそ。

庸子 私お母さんのこと好きだよ。お母さんなりの愛情もわかってるつもり。けどそういうの強要されるのは嫌だった。いいでしょ、嫌なところがあったって。

麻衣子 我慢しなさいよ、それくらい。

庸子 どうして、あんたが我慢してるから。

麻衣子 家族だから。

庸子 あんたほんとは苦しかったんじゃないの。

麻衣子 違う。

庸子 ほんとは好きって聞かれるの嫌だったのに、嫌って言えなくて。嫌だっと思ってる自分が許せなくなって。自分の気持ち殺して。

麻衣子 わかったようなこと言わないで。

庸子 私も自分を殺しかけてた。美希が教えてくれたの。あの子がいなくなったことに向き合おうと思ったら、気がつかなくちゃいけなかった。どうして自分を殺しはじめたのか。何から目をそらしているのか。私、必死に考えたよ。そして決めたの。お母さんを裁こうって。

麻衣子 出たって。

庸子 麻衣子。聞いて。

麻衣子 ……。

庸子 嫌いって言っていていいんだよ。

麻衣子 ……。

庸子 麻衣子……。

麻衣子 ……。

大友、庸子と麻衣子を見つめる。

暗転。

5

約一ヶ月後。二〇〇一年二月二十八日。午前十時。  
喫茶ペチュニア。

店は貸し切り。ドキュメンタリートーキョーの反省会が行われている。

雅彦が一方に座り、それに対峙して秋江、佐々木、森。

佐々木がメモをとりながら、雅彦の聞き取りをしている。

秋江の後ろにはドキュメンタリートーキョーの社員たち。

その中に取締役でもあるプロデューサーの田中、ディレクターの佐藤がいる。

社員たちの後ろに隠れるように大友と谷。

カウンターには妊娠七ヶ月目の麻衣子。

反省会は裁判のような雰囲気になっている。

佐々木 ウーマンライツとの連絡は。

雅彦 取ってます。

佐々木 その人たちはなんて言ってるんですか。

雅彦 訴訟起こすって言ってますよ。

佐々木 訴訟。

雅彦 ええ。

佐々木 どういう訴訟ですか。

雅彦 知りませんよ。直接聞けばいいでしょう。

佐々木 ……。

佐々木、助けを求めて、秋江を見る。

秋江が佐々木に目配せをする。

佐々木 協力を頼まれていますか。

雅彦 別に。

佐々木 でも、頼まれてるって……。

雅彦 現場がどういう状況だったか聞かただけですよ。

佐々木 教えたんですか。

雅彦 教えてねえよ。つか、なんでお前が質問してんだよ。

佐々木 ……。

秋江 私が頼んだんだよ。

雅彦 ……。

秋江 いいから続けて。

佐々木 先方にはなにも言っていないんですね。

雅彦 だいたいなんでここに森さんがいるんですか。

佐々木 なにも言っていないんですね。

雅彦 うるせえよ。

佐々木 ……。

森 いやあ悪いね。社長が来てくれっていうもんだから。

雅彦 社内の反省会でしょ。いいんですか、社外の人に聞かれても。

田中 まだわかってねえんだな。もう社内だけじゃ済まねえんだよ。

佐藤 このひと月会社がどんな状況だったかわかってんのかよ。毎日毎日、あっちからもこっちからも責められて。

タカシ 今日も電話ありましたよ。改ざんしたやつ出せってすごい剣幕で。

秋江 話先に進めろよ。なにも言っていないんだな。

雅彦 ……言ってません、なにも。

秋江 ほら、続けて。

佐々木 ……。

秋江 佐々木。

佐々木 ……。

秋江 やめたいのか。

佐々木 いえ。(雅彦に) なにも、言っていないんですね。

雅彦 ……。

佐々木 言っていないんですね。

雅彦 言えないでしょ。俺だつてなにが起こったのかわからないんだから。

佐々木 ウーマンライツはどういう訴えを起こそうとしてるんですか。

雅彦 番組に期待し、信頼して協力したのに裏切られた。しかも変更の内容は事前に説明されなかったから、協力をやめる判断もできなかった。それは取材される側の権利の侵害だつて。

秋江 権利権利権利…。

田中 期待したのは向こうの勝手だろ。それを裏切られたつて言われてもなあ。

佐藤 そうだよ。編集の自由はこっちにあるんだから、事前に変更内容伝えろなんて、そんなの検閲じゃん。

雅彦 そりや普通はそうです。でも、あの変更は普通じゃない。三浦さんのスタジオでの発言のねじ曲げられ方にしても、内容を意図的に変えようとしてるとしか思えない。

佐藤 そういうこともあるつて事前に言っとけばよかつたんじゃないの。

田中 お前先方になって説明したんだよ。

佐藤 誤解招くような説明したんじゃないだろうなあ。

田中 (佐々木に) ほら、お前もちゃんと聞けよ。

佐々木 ……どう説明したんですか。

雅彦 番組は法廷そのものになると。

森 そんなこと会議では言っただけじゃあない。

雅彦 記録性を大事にして、法廷とスタジオでの対談だけで構成することになってました。森 それはそうだけどね。それってそのものつてことなの。

雅彦 違うんですか。

森 うーん、そうなのかなあ。

佐藤 それって口頭で説明したの。

雅彦 企画書を渡して説明しました。

田中 企画書。なんで。

雅彦 今回は取材対象に特に信頼してもらう必要があった。それも短期間に。

田中 だからって、企画書渡すのはリスキーだよ。

佐藤 俺だつたらしないね。そんなこと。

雅彦 限られた法廷という場のなかでインパクトのある、ドキュメンタリーとして成立する映像を撮るためのポジジョンを確保する必要があったんですよ。

佐藤 でもそのせいで過剰に期待させちゃったわけでしょ。

雅彦 いや、そういうことじゃなくて。

田中 誰の判断だつたんだよ。企画書渡そうって。大友か。

大友 それは……。

田中 なあ谷、どうなんだよ。

谷 ……覚えてません。

田中 白川。お前覚えてるだろ。谷か、大友か。

白川 知りません。私が参加したの、もつと後で。なにも知りません。

雅彦 俺の判断です。大友さんには言ってます。でも、それがそんなに問題ですか。

田中 要は取材相手との距離感だろ。その辺の感覚の違いが問題になったんだから。やつぱ近すぎたんだと思うよ。じゃなかったらこんな期待させちゃうこともなかったんだし。

タカシ あー大事ですよ。距離感。

雅彦 違う。そうじゃない。今回の問題は右翼の攻撃の中で高崎部長が入ってきて、番組の方針が完全にひっくり返されたってことですよ。高崎部長の試写があるまで、制作者の間ではコンセンサスが取れてたし、思いを共有してたはずなんだ。

森 高崎部長は右翼とは関係ないって言ってるじゃない。あの人だつてこんなことになってシヨックを受けてるんだから。

雅彦 わかつてます。圧力かけてたのはもつと上だ。

森 ちよつと、あんまり適当なこと言うもんじゃないよ。

雅彦 だから、なにが起きたのか検証してくれて言ってるんだ。

森 検証って言ったってねえ。

雅彦 昨日、三浦さんたちがMHKに抗議しに行ったとき、帰りに三田村さんがエレベーターのところまで追ってきて、今回のことには政治家がからんでるって言ったそうです。ウーマンライツに届いた匿名の告発状にも、同じことが書かれてたって。俺が認識できたのは右翼の攻撃までです。でも俺には見えないところでもつと大きな力が働いてる。だとしたら、それを検証しないと、高崎部長のことだつてどう判断していいかわからない。

秋江 それはうちが考えることじゃない。

雅彦 うちが言わなきゃMHKは動かないじゃないですか。

秋江 ちよつとは身内を信じなさい。

雅彦 身内。社長は信じてるんですか、MHKに守られてると。

秋江 当たり前でしょ。

雅彦 嘘だ。本当に信じてたら、声を上げられるんじゃないんですか。守ってくれると思えないから、検証を求めることさえできないんだ。

秋江 視聴者巻き込むようなやり方したって聞いてもらえない。  
雅彦 じゃあどうすればよかったんですか。

秋江 迷惑かければ、切られたってしょうがないんだよ。

雅彦 どうして。

秋江 組織だから。

雅彦 ……明夫さんはそんなこと言わなかった。

秋江 なに。

雅彦 あの人なら問題公にして闘ってたと思います。

秋江 (笑って) あの人ならそうかもね。

雅彦 少なくともなにが起こったのか知ろうとはしたはずです。

秋江 あの人にはなにひとつ責任を果たさなかった。採算も考えないでやりたいことやって、挙げて句の果てに会社の金に手つけて。言うとおりにしてたら、今頃会社つぶれてるよ。

雅彦 そうかもしれないけど、明夫さんは…

秋江 この会社は私が守ってきたんだよ。潰すようなまね、絶対に許さない。

雅彦 守るっていうのはそういうことですか。

秋江 会社が潰れてもいいっていうのか。

雅彦 政治家の介入があつたかもしれないですよ。

秋江 だからなに。そんなこといまに始まったことじゃない。

雅彦 今回の件がうやむやになれば、圧力かけてきた連中は調子に乗って、これから先もつとあからさまに介入してきますよ。国の政策を批判するような番組は偏ってるってことにされて、放送できなくなるかもしれない。会社が残せたってそれじゃ。

秋江 M H Kの予算は国会で承認されてる。政治家からの圧力なんて珍しいことじゃない。右だけじゃない。左の政治家からだって、がんがん電話がかかってくる。そんなことも想定できなくて正論並べらんじやないよ。

田中 そうだよ、それくらい想定して番組つくれよ。

佐藤 「慰安婦」問題に、天皇責任だぞ。両論併記にしとくとかさ、やれることはいくらだつてあつただろ。

雅彦 それじゃ、自主規制だ。

佐藤 戦略だよ、戦略。なあ、佐々木。

佐々木 はい。そうですね。

田中 大体なんで受けたの、そんな番組。

佐藤 (佐々木に) 俺たち聞いてないよなあ。

佐々木 はい…

雅彦 そんなこと報告する決まりなんかありませんよ。

佐藤 でもこういう場合は会社に迷惑がかかる可能性高いんだから。

田中 事前に相談してくれてりゃね。

雅彦 相談してたらなんですか。却下してたっていうんですか。

森 いや受けてもらったのはね、感謝してるんですよ。こんな結果になっちゃったけどね。放送はできたんだから。

雅彦 放送できたってあれじゃ。

森 ほかの局はぜんぶ引いちゃったんだよ。番組にしたのM H Kだけじゃない。不本意な直し

させられたっていっても、ちゃんと法廷は紹介できたんだし。

雅彦 どこがちゃんと紹介できたんですか。どこが。

森 できたでしょ。MHKに勉強になったっていう電話もあったみたいだよ。やっただけでも

感謝しろとは言わないけどさ、努力は認めて欲しいよね。

田中 そりゃそうだ。

佐藤 確かに。

田中 こつちこそ被害者だよな。思っていた通りの番組になってなかったからって訴えられたんじゃない。

佐藤 ほんとですよ。俺ら人権活動家じゃねえんだから。

雅彦 うるせえよ。

佐藤 なんだ、お前。その態度。

雅彦 うるせえんだよ、つまねえ番組しか作れねえくせに。

雅彦と佐藤つかみ合いになる。

谷 やめてください。

白川 谷さん……。

雅彦 ……。

谷 そういう声出さないでください……。

雅彦 ……。

佐藤 乱暴だよなあ。

間。

雅彦 俺たちは被害者なんですか。

秋江 ……。

雅彦 大友さんもそう思いますか。俺たちは被害者だと。

大友 ……努力はしたんだ。

雅彦 俺は女性法廷とつながるシーンをカットした。

大友 お前がしなくてもカットされた。

雅彦 谷が天皇有罪のシーン落とさなかったって聞いたとき、もつとうまくやりやいいのについて思った。だから。

大友 番組を守ろうとしたんだ。

雅彦 守る。なにを。守ろうとしていたのは、谷だけだ。

大友 違う。そうじゃない。

雅彦 戦場での性暴力は裁かれない。俺たちは不処罰の連鎖を断ち切るどころか、またひとつ不処罰の歴史を作ったんだ。

大友 ……。

秋江 もういい。話は終わり。

雅彦 社長はどう思ってるんですか。あの女性たちのこと。

秋江 ……。

雅彦 人生めちやくちやにされて、体も壊して、家族にもうち明けられないまま何十年も苦しんできた、あの女性たちのことですよ。

秋江 ……ひどい話だと思う。

雅彦 それなら、責任者を裁いて欲しいっていうあの声にどう応えるんですか。

秋江 そっとしておいてほしい人だっている。

雅彦 責任者を裁いて欲しいっていう声にどう応えるのかですよ。

秋江 死んだ人間裁いたってしょうがないじゃないか。

雅彦 そう。それが俺たちの答えだったんです。裁く気なんかなかったんだ、最初から。

秋江 違う。

雅彦 責任者を裁いて、過去と向き合うのが怖いんだ。

秋江 裁くのは私たちじゃない。思い上がるな。

雅彦 じゃあ誰が裁くんです。あの人たちを無視するかぎり、俺たちは前に進めない。進むためには過去の罪と向き合うしかないんですよ。

秋江 戦争責任があるのは日本だけじゃないだろ。

間。

雅彦 ……戦場の兵士は上の指示に従っただけだ。誰もその罪を責めたりしない。だけど、この手はたしかに振るった暴力の感触を覚えてる。……覚えてるんだ。

俊子が入ってくる。

庸子が奥の部屋から顔を覗かせる。

俊子 (秋江を見つけ) ああ、社長さん、社長さん。

麻衣子 俊子さん、なに。今日貸し切りだって言ったでしょ。

俊子 そうなんだけど、ちよっと。

麻衣子 いまダメだって。

俊子 社長さん。なんか大変なんだってね。訴訟起こされるかもって。

秋江 なんでそれ。

俊子 麻衣ちゃんから聞いて。

麻衣子 私言っていないでしょ。適当なこと言わないですよ。

俊子 そうだっけね。しかし訴訟なんてね。みんな頑張ったのに。あの番組見たけど、ちゃんとしてたじゃないの。

秋江 悪いんだけど、いまちよっと。

俊子 わかっていますよ。でも、あの人たちほんとに被害にあったのかね。だって商売女でしょ。

ほんとだったら気の毒だけど、これだけ時間が経ってから言い出すなんてちよっと怪しいじゃない。誰か裏で糸引いてるんじゃないかねえ。だいたいお上から金を取ろうっていう根性が気にくわないよ。私なんか十六で仲居になって働いて、内職しながら子育てして、誰にも迷惑かけずにここまで来たんだ。

麻衣子 わかったから。もう。

俊子 わかっているよ。うるさいねえ。社長さん、私応援してるからね。

麻衣子 俊子さん。  
俊子 応援してるよ。  
麻衣子 いいから。

麻衣子、俊子を店の外に押し出す。  
庸子が雅彦のそばにいる。

庸子 行こう、一緒に。

麻衣子 (戻ってきて) お姉ちゃん。

庸子 (無視して雅彦に) あの法廷が開かれた場所に連れて行って。あの法廷がどんなどころで開かれたのか、見てみたいの。

雅彦 どうして。

庸子 あれは私の法廷だと思うから。

麻衣子 なにしに来たの、出たってよ。

庸子 社長さんも行きますか、あの法廷に。

秋江 法廷って……

庸子 持つてるでしょ、あなたも、ここ(胸)に法廷を。私も持つてるの、法廷を、ここに。(雅彦に) お願い、連れて行って。

雅彦 でも。

庸子 大丈夫だよ、あなたなら。見たんでしょ、法廷を。女たちの声を聞いたんじゃないの。

雅彦 聞いたよ、聞いたけど。

庸子 だったら生きてる、あなたの中で。肉体はいつか滅びても声は永遠に生き続ける。あなたはそれを伝えることが出来るんだよ。思い出すの。いっぱい聴衆。まなざし。割れんばかりの拍手。戦場で死んだ数え切れない人の声。あそこに集まった人たちの後ろにいる何千、何万の女たちの声。

雅彦 ……

庸子 聞こえるでしょ。

雅彦 ……生きてるって。

庸子 そう。死ぬことなんて考えなくていい。

雅彦 まだ大事なことがあるから。

庸子 行こう、一緒に。

雅彦 ……

庸子 ペチュニアのかげになんか隠れていないで。

雅彦、うなづく。

雅彦 (秋江に) 俺、会社やめます。

大友 藤田。

秋江 勘違いするな。うちにいたから好きに番組作ってこられたんだ。

雅彦 育ててもらったこと感謝してます。でも、もう黙ってられない。ありのままを告発します。

秋江 テレビ業界でやっていけなくなるよ。

雅彦 俺、ドキュメンタリートークショー好きでした。なにがあっても権力と闘える組織だと思  
ってたし、その一員であることが誇りでした。残念です。

秋江 ……。

雅彦 行こう。

麻衣子 ちょっと待ってよ。

雅彦 ごめん、俺、証言する。

麻衣子 なに言ってるの。そんなことさせない。

庸子 麻衣子。

麻衣子 お姉ちゃん。

庸子、ふり向く。麻衣子の言葉待たないにも言わないので、そのまま出ていく。  
雅彦、その後を追って出て行く。

麻衣子 (つぶやき声で) 大っ嫌い……。

人びとはその場から動けない。

暗転。

6

四年後。二〇〇五年春。午前十時。

喫茶ペチュニア。

ペチュニアの花が咲き乱れている。

店の隅の席で俊子がブレンドを飲んでいる。

別の席には佐々木が座って新聞を読んでいる。

店番をしているのは大友。疲れた様子。

大友、佐々木にブレンドを出し、ついでにペチュニアの切り戻しを始める。

それを俊子が目で追う。

奥の部屋から子どもが遊ぶ声が聞こえる。

俊子 あーちゃんいるの。

大友 え、ああ。

俊子 風邪でも引いた。

大友 ええ、まあ。

俊子 熱あると保育園預かってくれないからね。

大友 そうですね。

俊子 麻衣ちゃんが見てるの。

大友 ええ。

森、慌ただしい様子で入ってくる。

森 ごめん。遅くなっちゃって。

大友 いらっしやいませ。

森 大友ちゃん、ご無沙汰。どうフリーになったご気分は。

大友 大して変わりませんよ。(と、水を取りに行く。)

森 あれ、店番。

大友 子どもが熱出しちゃって。

森 大丈夫、打合せ。

大友 いま代わってもらいますから。

森 いいよ、急がなくても。僕、アールグレイね。

大友 はい。ちよっと待っててください。(と、森に水を出す。)

森 大丈夫大丈夫。

大友 (佐々木を指して) 彼が今回ディレクター引き受けてくれますんで。

佐々木 あ、どうも。ディレクターの佐々木です。

森 あ、どうも。

大友、部屋の奥へ。

森、佐々木の前の席に座る。

森 疲れ溜まってんじゃないの、大友さんも。

佐々木 これですか、昨日の毎朝新聞。

森 (新聞を受け取り) うちも昨日から電話鳴りっぱなし。いまも出がけに捕まっちゃってさ。

佐々木 うちもつすよ。社長ぶりぶり。

森 今更なんなんだろうな。もう四年も経ってるんだぜ。(と、新聞を置く。)

佐々木 やっぱ控訴審にタイミング合わせてきたんじゃないですかね。

森 判決ひっくり返そうってか。

佐々木 一審じゃMHKは無罪でしたからね。

森 おたかにとつちや悪くない展開なんじゃない。ドキュメンタリーキーヨーだけ有罪じゃ、

納得いかないでしょ。

佐々木 いやもういいつすよ。うちが有罪なのは変わんないんだから。

森 藤田ちゃんが証言しちやってるからね。

佐々木 MHKが沈黙守ってるんだから、黙ってりやいいのに。早く終わりにしたいつすよ。

森 彼、映画のほうに行ったんだっけ。

佐々木 らしいすね。まあインディペンデントでしょうけど。あれだけ噂になっちゃね。どの

局も怖くて使えませんよ。

森 控訴審でも証言するのかな、藤田ちゃん。

佐々木 するでしょ、そりゃ。一審のとき、法廷の外まで三田村さんのこと追っかけて行って、

「なんでそんなに冷静でいられるんですか。本当のこと言ってください。」って詰め寄って

んの見たんすよ。俺、思わず隠れちゃいました。

俊子 へえ。すごいねえ。  
佐々木 え、ああ。聞いてたんすか。

俊子 その記事もあの人がリークしたのかね。

佐々木 まさか。衆議院議員がMHKの局長クラス呼び出して番組に圧力かけたなんて、藤田さんにわかるわけないでしょ。

俊子 そうだよねえ。やっぱりね。

佐々木 (読んで) 「公平な番組ができないようなら、止めてしまえ」と、川中議員が発言、放送中止についても言及した」こんなのMHKの人間じゃないと証言できませんよ。ねえ、森さん。

森 ちよっと、佐々木さん。

佐々木 あ、すみません。

俊子 じゃあ、MHKの人がリークしたってこと。大ごとじゃない。

佐々木 でも、これちゃんと裏とつてるんすかね。

森 取ってるわけないでしょ。政治家が認めるわけないんだから。

佐々木 ですよねえ。

森 握りつぶされて終わり。国はそんなに甘くないですよ。

大友、出てくる。

大友 すみません。待たせちゃって。

森 いや、こちらこそ急に悪かったね。無理言っちゃって。

大友 (新聞を見て) それ。

森 また面倒くさいことになったな。

大友 気にしてませんけどね。もう関係ないんで。

森 ああ、そうね……。

大友 森さん、ブレンドじゃだめですか。

森 いいよ、別に。

大友 すみません、あいつ今手離せないらしくて。他のだと、俺作れないんで。

森 あ、そう。

大友、カウンターに行き、二人分のブレンドを用意する。

佐々木、新聞をしまう。

森 で、電話で相談した件なんだけどさ。

大友 来月ですよね。

森 頼んでた制作会社が取材対象ともめっちゃってさ。

大友 大丈夫ですよ。佐々木がディレクターやってくれるそうなんで。

佐々木 よろしくお願いします。

森 旅ものなんだけどさ。大丈夫？

佐々木 俺、旅もの得意っす。

森 いいねえ、佐々木ちゃん。硬派なドキュメンタリーはどんどん枠減っちゃってさ。

佐々木 そうなんすか。まあ俺的にはどっちでもいいっすけどね。  
森 でもぶっちゃけ大丈夫なの。

佐々木 なにが。

森 会社から独立した人から仕事振られるって、微妙なんじゃない。

佐々木 大丈夫ですよ。俺、契約ですから。

森 でもいろいろあったしさあ。

佐々木 大友さんはうちと決裂したわけじゃないですからね。社長だっつてしょっちゅう仕事振  
ってるし。

森 そうなんだ。

大友 都合良く使われてますよ。

大友、ブレンドを出し、席につく。

森 でも大友ちゃんが業界に残ってくれて嬉しいよ。

大友 ……。

森 まあ僕らは業界に踏みとどまってやれることやっていきましようよ。

大友 ……。

奥の部屋から麻衣子が顔を出す。

麻衣子 大友さん。

大友 なに。

麻衣子 すみません、打合せ中に。(大友に) テレビ。記者会見やってる。

大友 記者会見。

麻衣子 MHKの木村さん。あの時、三田村さんの下でデスクしてた人でしょ。

大友 そうだけど。なに記者会見って。

麻衣子 あの記事のこと。同じこと言ってる。

森 うそ。木村さんが。

佐々木 いまやってんですか。まじで。

麻衣子 うん、やってる。ちょっと見て。早く。

麻衣子、奥の部屋に入る。

テレビのボリウムを上げたらしく、テレビの音が聞こえてくる。

男たちはカウンターまで集まって、部屋のなかを覗く。

俊子はその後ろから、テレビを見る。

テレビからの音声。カメラのシャッター音。

司会「えー質疑のある方。じゃそちら。」

記者「毎朝新聞です。なぜ会長の責任であると考えたのですか。」

木村「あの時、政治的な圧力を背景としたつくり直しが行われたわけですが、実際、

水沢会長の体制になってから、放送現場への政治介入が、日常茶飯事に起こるよう

になってしまいました。水沢体制のもっともおおきな問題というのは、政治介入を恒常化させてしまったということです。」

記者「あの時、具体的にはどういう介入が行われたのですか。」

木村「信頼できる上司の話では、二〇〇一年の一月、放送の数日前に、川中議員に職員が呼び出され、放送をやめると、言われたそうです……。それから、一月二六日、MHKの幹部が矢部、川中両議員に説明し、手直しするから放送させてほしいと、言ったそうです。」

カメラのシャッター音。

佐々木 知らなかったんすか。

大友 いや……。

森 やったな。木村さん。

佐々木 でも、あれじゃ証言として弱いすよ。言われたそうですとか、言ったそうですとか。

森 帰るわ。これちよつとまづい。

佐々木 俺も戻ります。打合せ、また連絡しますから。

森、佐々木、慌てて金を払い、出て行く。

大友、まだテレビに見入っている。

テレビからの音声。

司会「えーほかには。」

記者「関東テレビです。なぜ四年も経ってから告白する気になったんですか。いままで黙っていた理由をお聞かせください。」

木村「……家族が路頭に迷うわけにはいかないので、この四年間、非常に悩んで……。泣く。カメラのシャッター音。」やはり、真実を述べる義務があると、決断するに至りました。」

大友 ははは。（と、笑い出す。）

テレビからの音声。

司会「では、記者会見はこの辺で終わります。」

カメラのシャッター音。

大友、笑いが止まらず、笑い続けている。

麻衣子がテレビを消して、出てくる。

麻衣子 どうしたの。

大友 はははは。

麻衣子 ねえ、敏也さん。

大友 だって、おかしくて。（と、笑い続ける。）

麻衣子 なが。

大友 家族が路頭に迷うわけにいかないって。藤田なんかとつくに路頭に迷ってるよ。谷だつて田舎帰って。なんなんだよ、路頭に迷うわけにいかないって。笑わすなよ。  
麻衣子 ……。

大友 笑わさないでくれよ。(と、笑い続ける。)

部屋の奥から子どもが大友を呼ぶ声がある。

「パパ。パパ。」

大友 あーちゃん。パパ、ここにいるよ。

「パパ、パパ。」

大友 ……俺も同じだ。

大友、絶句する。

子どもは大友を呼び続ける。その声が大きくなる。

麻衣子、奥へ子どもの様子を見に行く。

大友 聞こえてる。いま行くよ。いま行くから。

大友、子どもの元に行こうと思うが動けない。

俊子 ばかだねえ、どいつもこいつも。

大友 え。

俊子 会社は無罪にしようとしてくれてるんじゃないか。それを圧力だなんだって。恩をあだで返すとはこのことだね。

大友 ……。

俊子 うちのお父ちゃんは大陸に行つてから人が変わった。なにがあつたのか、酒に溺れて、お母ちゃんに暴力振るつて。私だつてさんざん苦労したよ。でも、しょうがないじゃないか、みんなひどい目に遭つたんだから。だれのせいだと糾弾したつてはじまらない。あんたもね、変な気起こすんじゃないよ。戦争なんてねえ、誰の責任でもない。時代が悪かつたんだから。辛いことを思い出さなくて済むようにしてくださっているんだから、この国の偉い人たちが、感謝して従わなくちゃ罰があたるよ。わかつたね、変な気起こすんじゃないよ。

大友 ……。

部屋の奥から子どもが大友を呼ぶ声がある。

俊子 (奥に向かって) どうした、あーちゃん。パパはここでしゅよ。

大友 やめろ。

俊子 あーちゃんのために一生懸命働いてましゅからね。

大友 違う。俺は…

俊子 さて、帰って掃除しようかね。

大友 ……。

俊子 (財布から金を出し) はい、五百円。麻衣ちゃん、また来るよ。

俊子、金を払い、出て行く。麻衣子出てくる。

大友、椅子を蹴り飛ばし、ペチュニアのプランターが倒れる。

麻衣子 なにすんの。

大友 ……。(ペチュニアを踏みつぶす。)

麻衣子 ちょっと、やめてよ。

大友 ……。(踏みつぶしつづける。)

麻衣子 やめてってば。

麻衣子、大友をなんとか止める。

大友、立ち上がる。

麻衣子 どこにいくの。

大友 ……。

麻衣子 ねえ、どこにいくの。

大友 ……いかなきゃ。

麻衣子 どこに。

大友 白い花を見たいんだ。

麻衣子 白い花。

大友 ペチュニアの原種。いつかお姉さんが言った。

麻衣子 ……。

大友 咲いてるはずなんだ、この国でも、まだ。

大友、扉を開ける。

麻衣子 ちょっと、待って。

大友、出て行く。

麻衣子、呆然とする。

奥の部屋から、子どもが大友を呼ぶ。

麻衣子 あーちゃん。パパ、いま忙しいから。

子どもの声。

麻衣子 あーちゃん。ママが行くよ。ママのこと好き。ママのこと……。ママのこと……。

麻衣子、立ち尽くす。  
子ども声が聞こえる。

溶暗。

幕

(第十稿 二〇一八年九月十日)

参考文献

- 「女性国際戦犯法廷 NHK番組改変裁判 記録集」(日本評論社)  
「番組はなぜ改ざんされたか」NHK・E TV事件」の深層」  
メディアの危機を訴える市民ネットワーク編  
「NHK、鉄の沈黙はだれのために」永田浩三著(柏書房)  
「NHKと政治権力 番組改変事件当事者の証言」永田浩三著(岩波書店)  
「女性国際戦犯法廷のすべて 「慰安婦」被害と加害責任」  
アクティブ・ミュージアム 女たちの戦争と平和資料館  
「女性国際戦犯法廷の全記録Ⅰ・Ⅱ」バウネット・ジャパン編  
「踏みにじられたペチュニア事件」テネシイ・ウイリアムズ著